

S
A
N

く 天使の生まれる場所

くらもちひろゆき

すべての生まれたもの

そして生まれなかったものに捧ぐ

登場人物

藤堂 忍	新人助産師(23)
飯島 美貴	助産師(36)
峠 うぐいす	婦長(51)
山本 佳都子	主任看護師(36)
杉田 珠美	看護師(28)
伊藤 玲	看護師(24)
水谷 早苗	准看護師・学生(20)
小笠原 伊織	産科医・大先生(69)
鈴木 繁美	事務員(32)
火野 杏子	不妊の妻(33)
火野 剛史	不妊の夫(37)
大郷 淳	入院患者(28)
岩本 環	入院患者(31)
岩本 重盛	その夫(31)
田村 裕恵	患者(28)
竹花 しずか	妊婦(20)
竹花 道高	その夫(45)
柳沢 深奈子	患者(26)
マリオ	付き添い(不明)
片岡 福子	臨月の妊婦(40)
片岡 輝彦	その夫(24)
下川原 綾菜	高校生(16)
久保屋敷 匠	医療用品営業(32)
森下 多美代	花屋(36)
怪しい男	泥棒(不明)

ここはとある個人産婦人科医院のロビー。ゆったりとしたソファがあり、明るく、清潔な空気が漂っている。壁には母親学級の案内や赤ちゃん用品のポスター、そして一週間の診療スケジュールなどが貼ってある。それによると、今日は院長が不在で大先生が診療する日らしい。壁際にはマガジンラックがあって、妊娠出産関係の本、雑誌が置いてある。ロビーを通過してから上がる階段があり、途中まで客席から見えている。ソファに囲まれて中央にはテーブルがデンと置いてある。

・開演前

その0「早朝仕事」

1

一人惚けたように座っている助産師の飯島。どうやら彼女は夜勤だったようである。しばらく座っているが「ふうー」と一つ大きなため息をついて立ち上がり、伸びをして去る。静寂。

耳を澄ますと鳥の鳴き声や車の通る音が微かに聞こえる。しばらくしてから飯島再登場。またぼーっと座ってみるが、今一つ落ち着かないようで、やたらと体を動かしてみる。そしてまた「ふうー」とため息をつき、伸びをして去る。

2

ぱたぱたと准看護師で学生の水谷が入ってくる。

水谷 おはようございまーす。

玄関の方へ回ると「シャー」という、カーテンを開ける音がして、「ぐわーん」という、自動ドアの開く音がする。車の音が少し大きく響き、自動ドアの閉まる音。ぱたぱたと急ぎ足で戻り、通り過ぎる水谷。有線の音が入る。色々チャンネルを変え、洋楽のかかっているチャンネルに合わせる。しばらく音楽だけがかかっている。

水谷、花を生けた花器を抱えて登場する。そしてそれをテーブルの中央に置いて、位置を確認する。

水谷 よし、うん、きれいきれい。

二、三歩下がって確認し、去る。
掃除機の音。掃除機をかけながら、水谷登場。しばらく掃除機をかける。
飯島登場。

飯島 (水谷に) 引き継ぎ。

水谷 え？

飯島 引・き・継・ぎ。

水谷 ・・・おはようございます。

飯島 おはよう。

水谷 あの・・・

飯島 あ、学校か・・・。

水谷 はい。

飯島 ・・・ぼけたかな。

飯島、去る。

音楽にのって掃除機をかける水谷。

3

鈴木登場。掃除機をかける水谷に背後からそーっと近づくと耳元に口を寄せ。

鈴木 おはよう。

水谷 うあぁっ、びっくりしたぁー、おはようございます。

鈴木 ナーイスリアクション。

水谷 なんて足音しないんですか？

鈴木 それはね・・・うふふっ。

振り返って去りかける鈴木、去りぎわに。

鈴木 おはよう。

伊藤 (声) おはようございます。

鈴木 血圧低いー？

鈴木去る。

掃除機をかける。しばらくして。

峠 (声) おはようございます。

藤堂 (声) おはようございます

水谷 おはようございます。
峠（声） おはようございます。
藤堂（声・同時に） おはよう。

4

掃除機をかける。しばらくして。
山本、入り込みながら。

山本 おはよー。
水谷 おはようございます。

山本、息が荒い。

山本 朝から走って来ちゃったよ。ここ、掃除した？
水谷 あ、はい。

ソファに座る山本。バッグの中からヤクルトを取りだし、
飲む。

水谷 ヤクルトですか？
山本 朝はヤクルトです。
水谷 本物ですか？
山本 え？

山本、水谷にヤクルトを見せつける。

水谷 あ、本物だ。

山本、ヤクルトを開けて一気に飲み干す。
飯島登場。

山本 （ヤクルト飲んで）ふうーっ。おはようございます。
飯島 あ、おはようございます。師長来た？
水谷 あれ、そっちにいないですか？
山本 着替え中かな？
飯島 引き継ぎ。
山本 あ、はい。

山本、立ち上がる。飯島と共に去る。

・開演

そのー「院長不在」

有線のチャンネルが変わる。クラシックのチャンネルだ。

水谷 あ。

八時三十分を告げる市役所の音楽が流れる。
自動ドアの音。

水谷 おはようございませーす。

ばたばたと靴を持って現れる杉田。

杉田 おはよ、おはよ。みんな来た？ 来てるよね。やっばー。でも、まあ、セーフかな？

峠師長登場。

峠 アウト。

杉田 おはようございます！ すいません！

峠 おはようございます。スリーアウトでチェンジ。

杉田 チェンジですか！

峠 チェンジです。

杉田 ええーっ！

峠 早く着替えてらっしゃい。

杉田 はい、えーと、はい。

杉田、素早く去る。

峠 水谷さん、学校は大丈夫？

水谷 だいじょぶです。

峠 今日も一日ファイトね。

水谷 あ、はい、ファイトでいきます。

峠 ファイトー、はい。

水谷 え？ あ、はい、ファイトー。

峠 違う違う、ファイトーって言ったら、オーでしょ。

水谷 え？ ああ。

峠 ふふうふうふう。

山本、顔を出す。

山本 師長、ちよっと。

峠 おはようございます。

山本 おはようございます。

峠 何？

山本 今朝方、（後ろを振り返って）ですよね。

峠 はいはい。

峠、去る。

2

残った水谷は、掃除を終え、掃除機を片づける。ふと、目に留まったマガジンラックから、一冊週間誌を取り出し、ぱらぱらとめくる。

とあるページを開いて、読んでいる。

伊藤登場。メモ板を持っている。

伊藤 蠍座だっけ？

水谷 そうですけど、これは、なんか、違うやつ。

伊藤 天王星人？

水谷 プラスです。

伊藤 困っている外国人がいたら積極的に声をかけましょう、思わぬ幸運が転がり込んでくるかも。

水谷 なんて覚えてんですか？

伊藤 わたしもそうだから。

水谷 なーるほどって、普通覚えてないですよ。

伊藤 でも、困った外人なんてそういないよね。

水谷 そうですね。

伊藤 あ、困ってる外人か。

藤堂登場。

伊藤 ラッキーアイテムは、はんだごて、なんじゃこりゃ。

藤堂 見して見してー。あれ？ 学校は？

水谷 あ、はい、今行きます。んじゃ。（雑誌を伊藤に）

伊藤 はい。

藤堂 お昼には帰ってくるの？

水谷 ええ、とりあえず昼には・・・。
藤堂 どれどれ。

水谷、掃除機を持って去る。

藤堂 油断していると思わぬ災難が。自信を持って冷静に対処すれば、大きな飛躍の時となるでしょう。うわあ、災難だって。

伊藤 だって、ほら、自信を持って冷静に対処すればいいんじゃない？

藤堂 そんな、出来ればいいんですけどね。

伊藤 ラッキーアイテムはビデオ、これはまともだな。

3

峠、山本、飯島、話しながら登場。

素早く雑誌を戻す伊藤。

峠 そんなにかかっちゃったんですか？

飯島 もう明け方ですよ。

山本 それじゃあ、院長大変ですよ。

峠 寝ちやうんじやないですか？

山本 発表とかするんですか？ 院長。

峠 さあ？

飯島 一応母体は無事なんですが、問題は・・・。

山本 あ、伊藤さん、あたしたち行くから、戻ってて。

伊藤 あ、はい。

山本 えっと、あと、珠ちゃんいるから、藤堂さん一緒に来て。

藤堂 はい。

伊藤からメモ板を受け取る山本。

伊藤去り、階段を上がってゆく四人。

峠 で、問題は？

飯島 あのですね・・・。

藤堂 なんか、災難ですか？

山本 うーん。

飯島 まあ、そうね。

峠 そういう言い方しちやいけません。

藤堂 すいません。

階段へ消える四人。

ぱたぱたとバッグと靴を持った水谷登場。ぐるりと見回して。

水谷 行ってきます。お昼には戻ります。

受付から鈴木の声。

鈴木(声) 行ってらっしゃーい。ストーカーに注意してねー。

水谷 え？

行きかけるが戻って。

水谷 ストーカーって・・・

鈴木(声) 冗談。中津川じじいよろしくー。

水谷 行ってきます。中津川じじい・・・

水谷、玄関の方から去る。自動ドアの音。

4

有線からのクラシックだけが響く。

自動ドアの音。

現れたのは、火野杏子である。受付の前に立ち、バッグの中から診察券を出す。

鈴木(声) おはようございます。

杏子 おはようございます。

鈴木(声) ちょっとまだ大先生みえてないんでお待ちくださいね。

杏子 はい。

杏子、ゆっくりと歩いて最も目立たないソファに腰を下ろす。

小さなかけ声が入る。

杏子 どっこいしょ。

バッグを傍らへ置き、一通りロビーの中を見回す。そして、マガジンラックに目を留め、立ち上がってしばらくじっとのぞき込んでいるが、結局手には取らず、深々とソファに沈み込む。

自動ドアの音。反射的に玄関の方を見る杏子。

入ってきたのは杏子の夫剛史である。警戒心たっぷりにキョロキョロし、恐る恐る入ってくる。

鈴木（声） おはようございまーす。

剛史 （びくっ）あ、え、おはようございます。

杏子 どうしたの？

剛史 いやあ、なんかね。

杏子 こっち、座ったら、立ってると目立つよ。

剛史 ああ・・・しかし、なんか、あれだね、いつ来ても落ち着かないね。

杏子 そりゃね。

剛史、壁の週間スケジュールを見つけて。

剛史 あれ？ 今日院長不在だったよ。

杏子 ああ、そうみたいね。

剛史 大丈夫？

杏子 こっちは専門大先生だから。

剛史 ああ。

杏子 座らないの？

剛史 いや、うん。

剛史、落ち着きなくあちこちを見回している。

杏子 どうしたの？

剛史 いや、あの、トイレ。

杏子 ああ、あっち。

剛史 あっち。

剛史、トイレに行くがすぐ戻ってくる。

剛史 なんか、女子トイレしかないんだけど。

杏子 あ、そう。

剛史 いいや、俺、外行ってくる。

杏子 そんな、聞けばいいのに。

杏子立ち上がり、受付へ。

杏子 あのー、すいませーん。

剛史 いいからいいから、俺、外行ってくる。

そそくさと出ていく剛史。自動ドアの音。

鈴木（声）　なんでしよう？

杏子　あの、いや、男子トイレってどこですか？

鈴木（声）　ああ、二階です。

杏子　あ、はい。

杏子戻りソファに座る。

5

階段から、飯島、岩本重盛が下りてくる。

重盛　一度ちよつと会社にも顔を出さなきゃいけないんで……。

飯島　まあ、眠ってますからしばらくは……。

重盛　すいません。

飯島　なるべくついててあげてください。

重盛　あと、なんか、他に、葬儀屋で……。

飯島　まあ、あの、これさえあれば……。

と、手で、長方形の箱を描く。

重盛　そうですね。

飯島　まあ、向こうでも分かっているとありますが……。

重盛　ええ。

飯島　ドライアイスとか。

重盛　ああ。

飯島　それじゃあ、わたしもこれから帰ってしまうので、別のものに引き継ぎましたから。

重盛　あ、はい。

重盛出て行きかける。

飯島　あの……。

重盛　はい？（振り返る）

飯島　なんとも、言えないですけど……。

重盛　はい……。

飯島　あんまり、頑張らないで、背負いこまないで。

重盛　いや……はい……。

飯島　天気、良くなりそうですよ。

重盛 そうですね。
飯島 行ってらっしゃい……。
重盛 行ってまいります。

出かけてゆく重盛。

自動ドアの音。

一つ伸びをしたため息を大きくつく飯島。

6

振り返り、戻ろうとすると杏子に会う。

飯島 あ。
杏子 おはようございます。
飯島 おはようございます。今日は、一人ですか？
杏子 いえ、夫が……。
飯島 ああ。
杏子 今、ちよっとトイレに……。
飯島 お休み取って？
杏子 ええ、まあ。

間。

自動ドアの開く音。反射的にそちらを向く杏子と飯島。

自動ドアの閉まる音。

飯島 あの、わたし、夜勤明けなもんで、これで……。
杏子 ああ、ごくろうさまです。
飯島 それじゃあ……。
杏子 あの。
飯島 はい？

自動ドアの開く音。そして閉まる音。

杏子 ……あの、なんかあったんですか？
飯島 え？ ああ、今朝方、ちよつと……。
杏子 ああ、ちよつと……。
飯島 長いこと助産師やってますけど……かける言葉もないとき
ってあるんですよ。
杏子 はあ……。
飯島 子供が出来るってどんなでしょうね？
杏子 え？

飯島 どうなでしようね。
杏子 ……どんなでしようね。
飯島 ……それじゃあまた。
杏子 あ、はい。

飯島、去る。

7

自動ドアの開く音。自動ドアの閉まる音。そしてまた開く音。閉まる音。数回繰り返される。
身を乗り出し、玄関を伺う杏子。
走り出てくる鈴木。ダダダッと玄関まで行く。そして戻ってくる。

鈴木 (杏子に) なんか、子供がいたずらするんですよ、よく、ね。まったくねえ。はっはっは。

杏子 子供ですか。

鈴木 自動ドアなんて珍しくないでしょうにね。

杏子 はあ。
鈴木 今でもピンポンダツシュとかやってるんですかね、ガキどもは。お騒がせしました。

去ろうとすると登場した大先生とぶつかりそうになる。

大先生 おおお!

鈴木 あ、すいません。

大先生 繁美ちゃん、いつも元気だね。

鈴木 おはようございます。

大先生 おはよう。

杏子 おはようございます。

大先生 ああ、おはようございます。あんまりご隠居稼がせちゃいけないよ。年寄りなんだから。

鈴木 大先生、こういうときだけ都合良く年寄りになんないてくださいよ。

大先生 ちゃんとほら、せがれないってみんな知ってるの？

鈴木 一応、ちゃんと、ここに。

壁の週間スケジュール表を指差す。

大先生 おおおおお、ん？ だめだ、俺代わりに診察することにな

ってるじゃないの。

鈴木 だってそうでしょう。

大先生 だめだそれじゃ、患者さん来るでしょう。

鈴木 ええ、まあ。

大先生 楽隠居させてくれねえもんな。

と、杏子の顔を見る。

杏子 はあ……。

鈴木 (同時に) いや、まあ、あたしは……。

大先生 表にな、でかどかと貼っついてちようだいよ「院長不在」

って、模造紙かなんかに。ね、お願い、繁美ちゃん。

鈴木 でも、一応、師長か誰かに……。

大先生 ね、頼んだから、よろしくね、繁美ちゃんからしゃべって

いて、だって、うぐいすさんおつかないから。

鈴木 それについてあたしは何も……。

大先生 頼むな。

大先生、診察室の方へ消える。

鈴木 まったく。

杏子 大先生って面白いですね。

鈴木 面白くないんですよ、普通は。

杏子 はあ……。

鈴木 ……ぜんぜん……。

杏子 ……うぐいすさんってなんですか？

鈴木 師長です。

杏子 声がいいからですか？

鈴木 名前です、本名。

杏子 うぐいす？

鈴木 名字は峠です。

杏子 あら？

鈴木 旧姓は違うらしいですけど。

杏子 はあ。

鈴木、去る。

杏子 ……峠、うぐいす……。

遠くでうぐいすの音がする。

自動ドアの音。

杏子、ちらりとドアの方を見ながらマガジンラックから雑誌を取る。

柳沢登場。診察券を窓口に出し、誰とも目を合わせないようにうつむき加減で一番目立たないソファに行こうとするが、杏子に気付き、杏子と一番離れたソファに座る。
伊藤診察室の方から出てくる。

伊藤 火野さん。

杏子 はい。

伊藤 (同時に) 火野杏子さん、剛史さん。

杏子 (立ち上がりながら) はい、あの、まだ、ちょっと……。

伊藤 え？ なんですか？

杏子 あの、夫が……。

伊藤 ああ、でも、とりあえずどうぞ。

杏子 あ、はい。

と言いながら診察室の方へ

伊藤ちらりと柳沢を見る。少し怪訝そうな顔をして火野の後に続く。

ほぼ同時に山本階段から下りてくる。柳沢の後ろ姿を見て。

山本 おはようございます。

柳沢 (振り向き) あ、おはようございます。

山本 (辺りの様子を少しうかがって) ……柳沢さん？

柳沢、山本と目を合わせないようにしている。

山本 今日？

柳沢 ……はい。

ため息をつく山本。

山本 またかい。

柳沢 でも、あたし……。

山本 でもじゃないでしょ……。

柳沢 はい……。

山本、柳沢の背後に回り、肩を揉みはじめる。

山本・・・こってるねえ、あたしよりこってるかも知れないね。

柳沢 すいません。

山本 自分の体は、自分で守らなきゃね。

柳沢 はい。

山本 子供じゃないんだから・・・。

柳沢 あ、そこ、そこ気持ちいいです。

大郷淳、下りてきて、外に行こうとするが、山本の姿を見て、トイレに入ろうとする。

と、気配を感じた山本が挨拶をする。

山本 おはようございます。

大郷 おはようございます。

大郷、トイレへ。

自動ドアの音。

山本 以上、サービスはここまで。

柳沢の両腕をばんばんと叩き、診察室の方へ去る山本。

9

田村登場。診察券を受付に出し、杏子のいなくなった最も目立たないソファへ。

神経質そうに爪を噛む柳沢。

田村がソファへ座ると同時に診察室の方から現れる杏子。

田村が座っているソファを一瞬見て、舞台上の二人から等距離で、最も遠い位置を選んで座る。

見事な二等辺三角形。間。

鈴木登場。カレンダーの裏か何かに「本日院長不在」と書いてあるらしい紙を持ってくる。舞台上の三人のちょうど中央にさしかかったころ、急にきびすを返して戻る。どうやらテープを忘れたようだ。

間。

伊藤登場。

伊藤 柳沢さん、柳沢深奈子さん。

柳沢 はい。
伊藤 どうぞ。
柳沢 はい。

柳沢、立ち上がろうとするが、バランスを崩して座ってしまふ。

柳沢 はは、なんか、お尻が重いみたいです、はは。

伊藤 お尻、ですか？

柳沢 ええ。

伊藤 大丈夫ですか？

柳沢 多分、大丈夫だと思います。

伊藤 ごゆっくり。

柳沢、再び立ち上がり、ゆっくりと診察室の方へ。後について伊藤診察室へ去ろうとするが、振り返り、柳沢の座っていたところを見る。そしてゆっくりと視線を動かして柳沢の去った方を見る。

10

伊藤の視線の先に不意に杉田が現れる。少し驚く伊藤。

杉田 なーにビビってんの？

伊藤 いや、急に現れないでくださいよ。

杉田 そんな、人を幽霊みたいに……

伊藤 だって急だったんですもん。

杉田 そんな急に出てくるわけないじゃん。

伊藤 まあ、そうなんですけどね。

杉田 (田村に) 裕恵ちゃん裕恵ちゃん。

田村は杉田に手を振る。

伊藤診察室へ去る。

田村 おはよう。

杉田 おはよーおはよー。

田村 元気ー？

杉田 うーん、元気元気ー。今日休みー？

田村 うん、検査結果聞きに……

杉田 あれーっ、今日院長いないよ。

田村 あ、そう？

杉田 大丈夫なのかな？
田村 いや、わかんないけど。ほんとは昨日だったんだけど……。
杉田 ああ……。ちよっと聞いてくるね。
田村 いや、まあいいけど。
杉田 いやいや……。
田村 あのさ、珠ちゃん。

鈴木登場。今度は手にセロテープを持っている。

杉田 何？
田村 さっき外にね……。
鈴木 ちよっと御免なさいね。

鈴木、杉田と田村の間を通り抜けていく。

田村 なんか変な人がね……。
杉田 (鈴木に) やっぱり院長いないんだよね。
鈴木 いないよ。
杉田 ずいぶんおっきいね。
鈴木 だって大先生が外に貼っとけって言うんだもん。
杉田 あ、そう。で、なんだっけ？(田村に)

鈴木、外へ。
自動ドアの音。

田村 ああ、なんかね、外に怪しい感じの人いたよ。
杉田 男？
田村 うん。
杉田 多いんだ。怪しい男は……。
田村 え？ なんで？
杉田 だって、ほら、ここ産婦人科でしょ。男の人来れば怪しくなるって。
田村 うん、まあね。
杉田 まあ、最近は怪しくない人も増えたけどね。うん、そう、最近急激に怪しくない人増えたね。

――
師長、階段から下りてくる。

峠 あ、杉田さん、上、お願いします。

杉田 はい、んじゃ。
田村 あ、うん。

杉田、階段を駆け上がろうとするが、ふと立ち止まり、戻って来て。

同時に、大郷、トイレから顔を出してすぐに引っ込む。

杉田 あれ？

峠 なんですか？

杉田 いや、なんだっけ？

田村 いいよいいよ……。

杉田 ああ。

峠 なんです？

杉田 あの、院長の検査結果って、院長説明した方がいいですよね。峠 どういうこと？

杉田 あのですね、この、田村さんがですね、ほんとに昨日来る予定だったんですが。

田村 すいません。

峠 ああ、そういうことね。

杉田 はい。

峠 まあ、ほんとに院長の方がいいと思いますけど、また来るのもあれでしょ、一応大先生に見てもらってそれからですね。

田村 あ、はい、わかりました。

杉田 ちゆうことで、いいかな？

田村 オーケーです。

峠 あれ？ 鈴木さん。

杉田 あ、そうだ、大郷淳。子供生まれましたよ。

田村 へえ。

杉田 なんか、でっかい子だったよ。

田村 よくまああの体で。

杉田 今入院してるから、後で見てきたら？

田村 ああ、うん。

自動ドアの音。
鈴木戻ってくる。まだ手には院長不在と書いてある紙がある。鈴木、受付から中に向かって。

鈴木 ちょっとガムテープありますかあー。ちょっとセロテープじゃだめみたい。

セロテープを受付に置く。

鈴木 伊藤さん、ガムテープ。あの、その机の一番下の引き出しにあると思うんだけど。ううん、クラフトテープじゃなくて、ガムテープ。ガムテよガムテ。

峠 鈴木さん、それ何？

鈴木 あ、これ、これはですか？

峠 なんてそんなに大きいのですか？

鈴木 あの、大先生に頼まれたんですけど……。

峠 ……あの親父……

鈴木 え？

何となく鈴木と峠を見る二峠 ちよっと待ってて。
人。

峠、診察室へ去る。

杉田 ごめん、ちょっと、また後で。
田村 うん。

杉田、後を追う。

12

鈴木、院長不在の紙を持ったままうらうらする。
間。

鈴木 ガムテープあった？

無言で出てくるガムテープ。

鈴木 いやあ、困っちゃいますね。ね、(田村に) ね、(杏子に)

曖昧に頷く二人。

鈴木 今ね、大先生に文句言ってますよ、師長。普段も結構怖いんですけど、本気か冗談かわかんなくて、でも、怒るとね、ホントに怖いんですよ。

杏子 そうなんですか？

鈴木 そうなんですよ。なんて言うか正義感強いんです。でもね、それでもないと師長なんてやってらんないですよ。

杏子 でしょうね。

田村 あー。

鈴木 はいなんですよう。

田村 外に、なんか変な人いませんか？

杏子 濃い顔でした？

田村 え？ え、まあ、そんな感じでしたけど。

杏子 猫背な感じの。

田村 うーん。

鈴木 あたしは気付きませんでしたけどねえ。

杏子 (同時に) それうちの夫かも知れないです。

田村 もしかして外人かも……。

杏子 え？ うーん。

田村 でもよくわかんないですよ。
杏子 外人かぁ……。なに人に見えました？
田村 ちよっと中近東系入ってるかなあって感じですよ。
杏子 中近東？ ちよっと見てきますね。

杏子立ち上がると同時に自動ドアの音。
集まる注目。

現れたのは思い詰めた顔をした下川原綾菜であった。

下川原 あの、助産師さんいますか？

鈴木 いますけど……。

下川原 飯島さんですか？

鈴木 飯島さんは……。どうだったかなあ？

下川原 助産師さんですよ。

鈴木 そうですよけど、飯島さんは……。

下川原 助産師の飯島さんいますか？

鈴木 多分来てないと思いますけど……。

下川原 じゃあまた来ます……。

鈴木 (同時に) ちよっと待っててね。

下川原、鈴木という言葉が耳に入らなかったように去って行く。

鈴木 あ、ちよっと……。

鈴木、下川原を追って去る。

13

二人きりになる田村と杏子。

杏子 なんででしょうね？

田村 中学生ってことではないですよ。

杏子 最近の若い子の年はわかんないですよ。

田村 出来ちゃったんですかねえ。

杏子 さあ……。5ヶ月、くらいですか？

田村 え？

杏子 あの、赤ちゃん。

田村 あの、わたし、そうじゃなくて……。

杏子 え？ あ、いや、あ、そう、その、すみません。

田村 いえ……。

気まずい間。

杏子 羨ましいですよ、出来ちゃったなんて……。

田村 え？

杏子 くないかしら？

田村 は？

杏子 コウノトリは来ないし。

田村 あたしも見たことないですね、コウノトリ。

杏子 白鳥はよく見ますけどね。

田村 白鳥じゃねえ。

杏子 カルガモもいますね。

田村 ああ、よくニュースになりますね。

杏子 いっぱい子供連れてね。

田村 あの、カルガモって、親子連れはよく聞きますけど、やや大きくなったカルガモの子供ってあんまり見ないですよね。

杏子 食われちゃうんじゃないですか？ イタチとか、キツネとか、人とかにね。

田村 ……人も、食べますか？

杏子 だって、美味しそうじゃないですか。

田村 え？

杏子 食べちゃいたいくらいかわいってことですよ。

田村 ああ。

杏子 うちのまわりにキャベツ畑があるんですよ……。

14

峠師長登場。

峠 鈴木さん、あの……あれ？ 鈴木さんは……。

田村 あの、さっきの、院長不在の人ですか？

峠 ああ、そうです、すいません。

田村 あの、なんか、女子高生みたいな人追いかけて出てっちゃんしましたけど……。

峠 女子高生みたいな人？

杏子 なんか、飯島さんに用があったみたいですよ。

峠 飯島さんに……。

田村 出来ちゃったんじゃないですかね。

峠 ふうーん……。あの、紙持ったままですか？

杏子 たぶん……。ねえ。

田村 ええ。

自動ドアの音。集まる注目。
登場したのは杏子の夫剛史だった。
手にはコンビニの袋を持っている。
一瞬ひるむ剛史。
また大郷顔を出して引っ込む。

15

杉田登場。

剛史 なに、か？
杏子 さっきの、変な男ってこれ
でした？

剛史 これってなんだよ。

田村 (同時に) え？

杏子 あの、さっきの、外にいた
変な人って・・・。

田村 ああ、違います。

杏子 ほんとに？

剛史 なんだよ、変な人って。

田村 あの、なんて言うか、種類
が違う感じです。

杏子 種類が違う？

田村 ええ、人間の。

杏子 そうですか、わたしはてっ
きりこの人だと思ったんですけ
どね。

田村 確かに、濃い顔で猫背な感
じで中近東じゃないけど沖繩系
って感じではありますね。

剛史 なんだよ。

田村 あ、ごめんなさい。

杏子 いいんです、いいんです。

この人だって十分怪しいんです
から。

剛史 怪しくないよ！

杏子 怪しいよ、態度が。

剛史 怪しくないって。

杉田 怪しいですよ。男の人は、し
ょうがないですよ、だってここ
産婦人科ですもん。

杏子 ほらあ。

剛史 いや、そういう意味なら・・・。

杏子 だとすればその怪しい男は
鈴木 ねえねえ、大先生怒られ

峠 困ったわねえ。どこ行っ
ち

やったのかしら鈴木さん。

杉田 え？ 鈴木さんどっか行
ったんですか？

峠 なんか、女子高生追いか
けてっいたらしいんですけど。

杉田 女子高生？

峠 まあ、貼り紙貼っていい
て言うだけなんですけどね。

杉田 はあ・・・。

峠 まあいいわ、すぐ戻って
くるでしょ。じゃああらため
てお願いね。

杉田 あ、はい。

峠 去る。

自動ドアの音。

鈴木戻ってくる。

杉田 あ、鈴木さん。

鈴木 はいいただきます。

杉田 貼っていいって、師長が。

鈴木 よしっ。大先生怒られ
た？

誰なんでしょうね。

田村 誰なんでしょう？

杏子 濃い顔で中近東系なんだって。

剛史 俺か？

杏子 なに買ってきたの？

剛史 ああ、目覚まし買って来ちゃった。

杏子 なんて？

剛史 売ってたんだよ。

杏子 (笑いながら) なんて目覚まし買ってくるのよ。

剛史 だってほら、壊れてるじゃない。

目覚まし時計を鳴らしてみる

剛史。

集まる注目。

山本登場。

山本 火野さん、火野杏子さん、

剛史さん。

杏子 はい。

剛史 (消え入りそうな声) はい。

火野夫妻、診察室へ去る。山本も去る。

16

残る杉田と田村。

杉田 さて、大郷淳のどこでも行く？

田村 ああ、うん、でも、大丈夫かな？

杉田 ん？なにが？

田村 いなくなっちゃって。

杉田 大丈夫大丈夫、そうすぐには順番来ないから。

田村 なんて？

杉田 守秘義務守秘義務。

田村 えーっ。

杉田 まあ、上に連絡来るように言っとくから、順番来たら。さあ、行こ行こ。かわいいよおー大郷淳の子供。

てた？

杉田 怒られてました。

鈴木 やっぱり……。

田村 どうでした、あの女子高生みたいな。

鈴木 どうも女子高生のようでしたよ。

田村 やっぱり。

杉田 女子高生？

鈴木 まあ、しゃべってくれなかつたけどね。

田村 出来ちゃったのかな？

鈴木 飯島さんなら話すんじゃないかなあ。

杉田 なんて？

鈴木 さあ。

鈴木、玄関へ去る。

自動ドアの音。

杉田、階段を上りかける。

田村それを追いかけている。

田村 あの、さっきのさあ、夫婦の人。火野さんって言ったっけ？
もしかして、不妊？

杉田 守秘義務守秘義務。

田村 えーっ。

杉田 守秘義務守秘義務。

田村 だってさあ、コウノトリだのキャベツ畑だの言ってたよおー。

杉田 守秘義務守秘義務。

杉田、田村二階へ去る。

自動ドアの音。鈴木戻ってくる。

鈴木 いたいた、わかった、変な男。あれでしょ、あれ、あれ？

誰もいない。

鈴木 うわっ、誰もいないよ。あれねえ、多分外人だよおー。

鈴木診察室のほうへ去る。

その2「妊婦登場」

トイレから様子をうかがうようにして大郷淳が出てくる。
誰もいないことがわかると、素早くロビーを横切って玄関
へ。自動ドアの開く音。

しずか・道高(声) あ、どうも……。
大郷(声) あ、あ、こんにちは。

自動ドアの閉まる音。

道高(声) んじゃ俺はここで……。
しずか(声) えーっ。
道高(声) だってほら、なんか縁起悪いし。
しずか(声) まだいいんでしょ。
道高(声) うん、まあ。
しずか(声) だったら……。。
道高(声) でも……。。
しずか(声) 最近ほら、旦那連れじゃないと恥ずかしいんだか
ら。

道高(声) ええっ？
しずか(声) もう当たり前だよ。
道高(声)ほんとに？
しずか(声)ほんとに。
道高(声)でも俺はそんな、あれだから。
しずか(声)いいじゃないの、格好なんて。
道高(声)でもさあ。
しずか(声)じゃああたしが寂しくてもいいの？
道高(声)いや……。。
しずか(声)みっちゃあん。
道高(声)……。。
しずか(声)ねえ。
道高(声)わかりましたよ……。。

2

しずかに手を引かれて登場する道高。何故か僧侶姿である。
しずかの方は、すっかり大きなお腹で、9ヶ月くらいの感
じである。

道高 誰もいないじゃない。

しずか だったら恥ずかしくないでしょ。

道高 うん、まあ。

しずか、道高の手を引いてそのまま中央のソファに座り、道高も座らせるとすぐに立ち上がって診察券を受付へ。

道高 もう、行くよ。

しずか なんで？ もう行っちゃうの？

道高 だって、こんなカツコしてここにいるの悪いじゃない。

しずか いいじゃない、誰もいないんだから。

道高 まあ・・・。

道高、キョロキョロしていたが、まるで猫でも見つけたかのように視線を止める。そして、何者かを追いかけるように視線を動かす。

しずか みっちゃん、どうかした？

道高 いや、うん。

しずか なんかいいた？

道高 いや、うん、なんか・・・。

しずか なに？

道高 ん、なんか、遊んでるみたいなんだけど・・・。

しずか ふーん。やっぱりいるんだあ。

道高 んじゃ、俺、行くから。

しずか そんなに急がなくてもいいでしょうよ。

道高 いや、だって。

しずか なんてそうほいほい引き受けちゃうのよ。

道高 いや、だって、定休日だったし、せっかく教わったんだから、

たまには復習しとかないと・・・。

しずか お経なんか復習しなくてもいいでしょう。

道高 でもせっかくだから。

しずか なにがせっかくなんだか。

道高 だからせっかくお経教わったんだからたまには・・・。

しずか 法事、好き？

道高 ・・・・んじゃ・・・。

しずか あたしに付き添うのがいやなんだ。

道高 いやそうじゃなくてね・・・。

しずか なんかいいるようなところに一人で置いてくんた。

道高 あとでお経あげてあげるから。
しずか いりません。
道高 大丈夫だよ、座敷わらしみたいなものだから、害はないよ。
しずか せめて誰か来るまでいてよ。
道高 ……はあい。

3

階段から下りてくる田村。

道高 ほら来た、んじゃ。

しずか みっちゃん！

道高 はい。

田村、人を捜すようにキョロキョロしてトイレの方へ行く。

しずか ほら、いなくなっちゃった。

道高 ええーっ。

しずか でも、早く終わっちゃうかもね。誰もいないから。

道高 そうだね。

しずか 待ってるから、お迎え。

道高 結構遅いかもよ。

しずか 大丈夫。

道高 あ、二階上がった。

しずか え？ なに？

道高 座敷わらし。

しずか あ、そう。

道高 ……一人の、お坊さん。

しずか え？

道高 A s o u なんちゃって……。

しずか じゃ、あとで。

道高 ……。

田村トイレから戻ってくる。そしてソファのはじに座る。

しずか いいよ、もう、一人じゃないし。

道高 んじゃ、まあ……。

しずか (田村に)今日は、空いてるみたいですね。

田村 ええ、なんか、院長先生いないみたいですよ。

しずか ああ、書いてありました。

道高 (同時に)え？ じゃあ誰診察してるんですか？

田村 大先生ですよ。

道高 ああ。

しずか 何ヶ月ですか？

田村 え、あ、いや……。

道高 5ヶ月くらいでしょう。

田村 いや、あの、あたしは……。

しずか 9ヶ月なんですよ、もう暴れて暴れて、ねー。

道高 すごいですよー、もう。

しずか もうすぐ胎動わかりますよ。

自動ドアの音。

道高 いらっしやいませー。(しまった) おほん、うえっへん。

うらっほん。うらっしやごほん。せー。

咳払いをする道高。

大郷登場。

田村 おおーっ、生まれたんだ
道高 んじゃ、しずかちゃん、俺、
って？
行くわ。

大郷 あれーっ、裕恵ちゃん。

田村 今珠ちゃんと上に行った
しずか んじゃ、迎えに来てねー。
道高 はーい。

んだけどいないんだもん。

大郷 今誰か、いらっしやいま
道高 道高玄関の方へ。

せーって言わなかった？
大郷 とすれ違う。

田村 うん、まあ。

大郷 なに？
しずか、道高に手を振る。

田村 まあ、わかんないけど。

大郷 はあ……。

道高、去る。

自動ドアの音。

そして、バッグの中から名付
け辞典を取り出して読み始め
る。

4

田村、大郷の方へ。

田村 名前考えたー？

大郷 いくつか候補はあるんだけどねえ。

田村 どんなのどんなの？

大郷 まあ、女の子だからねえ。
田村 クマとか、サメとか？
大郷 それもいいなあ。
田村 え？
大郷 トラとか、カメとか。
田村 冗談だよ。
大郷 あたしは本気。
田村 ええーっ。
大郷 なわけないでしょ。男の子ならね、虎吉亀吉麒麟吉。
田村 麒麟吉？

二人階段を上ってゆく。そして藤堂とすれ違う。
藤堂下まで下りると振り返り。

藤堂 大郷さん。

大郷 はい。(振り返る)

藤堂 たばこ、あんまり吸わない方がいいと思うんですけど。
大郷 はい。

藤堂 まだ、産後あんまりたってないですし、母乳にもニコチン出
ちゃうんですよ。

田村 でも、ストレスためるのもねえ。

大郷 まあ、ねえ。

田村 赤ちゃん、おっきかったんでしょ。

大郷 うん。

田村 妊娠中も吸ってたの？

大郷 まずね。

藤堂 そうなんですか？

田村 でも、赤ちゃん大きかったんでしょ。

大郷 うん。

田村 ちょうどよかったんじゃない？

藤堂 でも、やっぱり、赤ちゃんがたばこ吸ってるのと同じように
なるわけですから・・・。

田村 結果オーライってことで。やっぱりストレスが一番だめでし
よう。

藤堂 まあ、そうですね。

大郷 それより、なんか外に変な男いましたよ。

藤堂 え？

田村(同時に) それあたしも見
たー。
受付窓口から声がする。

大郷 なんだらうね。

鈴木(声) 竹花さーん。竹花

田村 うん。

藤堂 たばこは、まあ、ほどほどに……。

大郷 はあい。

二人背を向けて去って行く。

大郷 ほどほどになって、そんな吸ってるわけじゃないんだから。

田村 ちよつと神経質すぎ。

大郷 なに人かね、あの男。

田村 やっぱりー？

それを見送る藤堂。大きくため息をつく。

しずか さーん。

しずか はい。

名付け辞典を持ったまま立ち上がり、受付窓口に行くしずか。

鈴木(声) お小水、取ってく

ださいね。

しずか あ、はい。

一旦ソファに戻るしずか。

5

振り返り、気持ちを切り替えてしずかに話しかける。

藤堂 もうすぐですね。

しずか おかげさまで。

藤堂 名前ですか？

しずか ええ。

藤堂 わたし、助産師さんに名前つけてもらったんですよ。

しずか そうなんですか。

藤堂 結構難産だったみたいで、でも、助産師さんが頑張って自然分娩させてくれたんだそうです。それで、なんか、つけてくれたってなつたみたいで。

しずか そういうのもいいですね。

藤堂 でもねえ、忍ですよ忍。なんか、堪え忍ばなきゃいけないのかなあって思いますよ。

しずか ひらがなはね、やめようと思うんです。わたしもひらがななんで。

藤堂 ああ。

しずか あんまり簡単なものねえ。

藤堂 難しい名前だと小学生の時友達に尊敬されますね。

しずか わたしはバカにされました。いっつも風呂入ってるのかって。

藤堂 え？ なんで？

しずか のび太さんのエッチー！
藤堂 は？
しずか しずかちゃんですから。
藤堂 あああ。ドラえもんですか。
しずか 名前考えるのも大変ですよ。
藤堂 一生ものですからね。
しずか いか誰かに頼まれるかも知れないですね。
藤堂 さあ、それはどうですか。
しずか これから、赤ちゃんいっぱい取り上げるんでしょう？
藤堂 だったらいいんですけど。
しずか いつか、きつと頼まれますよ、名前つけてくれって。
藤堂 じゃ、いくつか考えといた方がいいですか？
しずか 役に立つかも知れませんが。
藤堂 はい。

藤堂、診察室の方へ去る。

6

二階から、岩本環がパジャマ姿で降りてくる。
しずかの姿を見ると、小走りに近づいて来て、しずかの隣に腰掛ける。
目を落としていた名付け辞典から顔を上げ、軽く環に会釈するしずか。

環 呼吸法はね、ヒッヒッフーって言うでしょ。でもヒッヒッて吸うんじゃないのよ。ヒッヒッて吐くの、ヒッヒッて。
しずか はあ・・・。
環 ヒッヒッもフーも吐くの。
しずか そうなんですか・・・。
環 だってヒッヒッて吸ったら、ヒッヒッて吸ったら、ヒッヒッ、ヒッヒッ、ヒッヒッ、ヒッヒッ、ヒッヒッ・・・。
しずか あ、あの・・・。
環 フーっ。ね、苦しいでしょ。
しずか はい・・・。
環 あたし、いきみかた上手だって言われたんです、みんなに。
しずか いきみかた・・・。
環 上手だって言われたんです。ヒッヒッフー、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー。わたしこれいつまででもできちゃうんですよ。明日までだって明後日までだってできちゃうんです。だって宇宙パワーが力を貸してくれたんです。ヒッヒッフー、ヒ

ッヒッファー、ヒッヒッファー……。

しずか だんだん気味悪くなってくるが、「ヒッヒッファー」を遮るようにきっぱりと言う。

しずか おめでとうございます。

環 そうなの、おめでたいの。だってわたしたちのいる宇宙より一段階上の宇宙に生まれたんですもん。
しずか そうですか。

しずか、立ち上がり、マガジンラックから雑誌を探すふりをする。

その後ろ姿に両手をかざし、念を送る環。

ふと振り返り、その姿を見てとてもいやーな顔をするしずか。それを振り切るようにトイレに行く。環は、その後ろ姿に両手をかざし続ける。

7

声が聞こえる。

杏子（声） まあ、がんばって……。

剛史（声） いやあ……。

山本（声） ああ、火野さん！

杏子（声） はあい。

剛史 診察室の方からプラスチックのコップを握りしめて登場。コンビニの袋も下げている。

山本（声） じゃなくて旦那さんの方。

剛史 はあい。

山本登場。追って杏子も登場。

山本 そっちじゃなくてこっちです。

と、診察室の方を指差す。

剛史 ああ。

山本 そこ左に曲がるとVIPルームっていうのがありますから。
剛史 VIPルーム……。

山本 完全防音で……。

剛史 はあ。

山本 いいの揃ってるんですよ。ビデオでもDVDでも。

剛史 あ、はい。

山本 二次元が良ければ、本もありますし、ネットもできますから。

いつのまにか登場している大先生。

大先生 いい精液はいいビデオからって、業界じゃあ常識だから。

剛史 先生。

大先生 伊織コレクション、素晴らしいよー。

剛史 あ、はい。

大先生 まあ、検査でもね、濃いーの取らないと。

剛史 はい。

大先生 こっちね、今使い方教えるから……。

杏子 すいませんわざわざ。

大先生 いやいや、趣味、趣味。

剛史 え？なにがですか？

大先生 まあ、いろいろ。

剛史 はあ。

大先生 自慢だし。

大先生、去る。

剛史、行きかけるが戻り。

剛史 あ、これ。

と、コンビニの袋を杏子に渡す。

杏子 あ、はい。

全員、なんとなく興味を持って環を見ている。

剛史、去る。

剛史 んじゃ。

手をかざしつづける環。

山本 届きましたよ、パワーは、十分に。

環 わかりますか？

山本 ……わかりますよ。

環 山本さんて金星人だったんですね。

山本 へ？ はい、そうですね。それより岩本さん、もう少し体休めないと。

環 大丈夫ですよ、宇宙パワーは無限ですから。

山本 ……二階の方が宇宙に近いですからもっとパワーをもらえますよ。

環 (嬉しそうに) わかっています。

山本 さあ。

環 山本さんにご存じでしょうけど宇宙パワーっていうのは、アルファ電波で送られて来んです。反対に毒電波はパワーを吸い取ってしまうのです

杏子 あ、はい。

よ。

山本 ええ、ええ。

杏子、ソファに座る。
環、山本に伴われて二階へ上がる。

8

自動ドアの音。

葉のバイヤー久保屋敷登場。

久保屋敷 ちわーす、愛と友情、努力と勝利のアルハンブラ薬局で
ーす。

久保屋敷、受付から顔をつっこむ。

久保屋敷 今日院長留守だった？ なんだよ、植木市のお誘いしに
来たのになあ。来週の日曜辺りどうですかね。それとも金魚がい
いかなあ。・・・わかんないって？ そりゃ、粋な趣味人っての
はなかなか理解得られないよ。まあ、ガーデニングじゃなくて園
芸だからな、言うより、庭だな、庭。ま、しょうがないよね。
え？ なに？ 大先生はいる？ ・・・はいはい。

伊藤登場。

伊藤 点滴終わりましたー・・・あれ？ 大先生は・・・。

久保屋敷受付から顔を出す。

杏子 あ、なんか、今、VIPルームの方へ行きましたけど。

伊藤・久保屋敷 ああ、VIPルームね。

伊藤、久保屋敷顔を見合わせる。

久保屋敷 チャーンス！ 大先生も好きだから。

伊藤 久保屋敷さん、これから大先生オペですよ。

久保屋敷 まだ始まってないでしょ。

伊藤 ええ、まあ。

久保屋敷 伊藤さん、今日も血圧低い？

伊藤 高いです。

久保屋敷　じゃあ塩分減らさなきゃ塩分。

久保屋敷、素早くVIPルームの方へ。

伊藤　あ、ちょっと。

久保屋敷、トイレ帰りのしずかとすれ違いざまに。

久保屋敷　元気な赤ちゃんが生まれますように。
しずか　あ、はい、どうも。

ついでに杏子にも。

久保屋敷　こちらにも。

久保屋敷去る。

9

伊藤、杏子としずかに向かって。

伊藤　薬屋さんなんですすよ。いつも一言余計なんですすよね。悪い人
じゃないんだけど。

杏子　ほんとに余計だわ。

伊藤突然ビクツと肩を震わせる。そして、猫を見つけてその行方を追うように目が泳ぐ。階段の上へ視線を走らせ、そしてしずかの周りへ。そのあいだにしずかソファに座る。

しずか　あの……。

伊藤　だめ！

しずか　え？

伊藤　あ、いや……。

しずか　何か？

伊藤　なんでもありません。

しずか　もしかして……。

伊藤　なんですすか？

しずか　見えるんですか？

伊藤　え？

しずか　見えるんですか？

伊藤　……ええ、まあ。

杏子 な、なんですか、見えるって……。
しずか まあ、座敷わらしみたいなのです。

杏子・伊藤 座敷わらし……。

伊藤 まあ、そんな感じですね。見えるんですか？

しずか いえ、あたしは……夫が少々。

伊藤 ああ……時々、看護師になったのは間違いじゃなかった
思いますね。特に産婦人科はね。

杏子 え？ なんですですか？

伊藤 新鮮な霊がね、たくさん……看護師と尼さんにはならない
方が良かったんじゃないかって思いますよ。まあ、尼さんにはな
ってないですけど。

伊藤 診察室の方に去る。

10

杏子 いるんですか？ そういうの。
しずか らしいですよ、よくわかんないですけど。

久保屋敷の音がする。

久保屋敷（声） ねえ、いれましょうよ、大先生。

大先生（声） そういう話はさあ、せがれにしてよせがれに。

二人登場。

久保屋敷 商品名「ミナスイートル」いいですよ。暖めて使うと。

大先生 使ったのか？

久保屋敷 一応、モニターしてます。

大先生 感心だね。

久保屋敷 お願いしますよ、ね。ほら、適温だから活きがいい。

大先生 だからせがれがないと。

久保屋敷 でも専門は大先生ですよ。

大先生 俺、これからオペだから。

久保屋敷 いいもの、あるんですよ。

大先生 ……え？

久保屋敷 好きでしょ、大先生。

大先生 誰？

久保屋敷 ちよっとここでは言えませぬえ。

大先生 ほうほう、ちよっと、たばこでも吸うかな？

久保屋敷 外、行きますか？
大先生 考えるかなあ。
久保屋敷 なんとか、ね。
大先生 どうだかね。

二人、玄関の方へ出て行く。
自動ドアの音。

――

プラスチックのコップを握りしめて剛史登場。

剛史 なんか、やっぱり落ち着かないよお。

杏子 そう？

剛史 だってさあ。

杏子 だめ？

剛史 うん。

杏子 帰る？

剛史 いやあ、そういうわけにもいかないでしょう。

杏子 そうねえ。

剛史 弱ったな。

杏子 ……してあげようか？

剛史 え？ いやあ……だって、それは、ねえ。

杏子 冗談。

剛史 え？ あ、うん。

杏子 まあ、がんばって……。

剛史 ……うん……。

剛史、VIPルームへ戻る。

杏子、ちらりとしずかを見る。

しずかも杏子の方をちらりと見る。目が合う。

素早く目を落とし、名付け辞典を読んでいるふりをするしずか。

杏子も目をそらす。

杏子 ……子供って……なんで欲しいのかな……。

杏子、再びしずかを見つめる。

しずかもゆっくりと目を上げ、杏子を見る。
間。

階段から下りてきた山本が足早に通り過ぎる。

12

自動ドアの音。戻ってくる大先生と久保屋敷。

大先生 いやいやいやいや。

久保屋敷 まずまずまずまず。

大先生 じゃじゃじゃじゃ。

久保屋敷 なんだかなんだかなんだかなんだか。で、なに人ですかね。

大先生 まあ、シルクロード系じゃないの？

久保屋敷 中近東ですかね。

大先生 なにしてんだ？

久保屋敷 なんか、待ってるみたいでしたね。

大先生 んじゃまずそういうことで。

久保屋敷 わかりました。まあ、明日にでも。

大先生 そんなに急がなくてもいいよ。

久保屋敷 今日中でも可ですよ。

大先生 いいよ、そんなに……。

久保屋敷 んなこと言ってる……。

大先生 それじゃ。

大先生、診察室の方へ去る。

13

久保屋敷、大先生を見送ってしずかに向き直る。

久保屋敷 奥さん、紙おむつとかもう揃えてます？

しずか まあ、少しは。

久保屋敷 うちね、基本的には薬とか医療機器の卸しなんだけど、

実は小売りもやってるのよ。でね、紙おむつとか粉ミルクとかね、

そういうのも扱ってるんですよ。

しずか はあ。

久保屋敷 何しろ卸しだからさ、そこらへんのお店の特売なんかより安くできるのよ。

しずか え？ どのくらい安いですか？

久保屋敷 まあ、まとめてなんだけどね、奥さん知ってる？ 大体

新生児用の紙おむつ92枚入りで1080円くらい。でもね、物

はほら、一流のあれだから。

しずか チャイルドシートとがあります？

久保屋敷 チャイルドシートは……ねえ。まあ、消耗品とか、小

物系だね。

しずか 考えときます。

久保屋敷 んじゃ、あの、電話くださいよ、届けちゃいますから、名刺、渡しておきましょう。ほんとにね、お願いしますよ、しずか ありがとうございます。
久保屋敷 んじゃ、こちらにも。

と、杏子にも名刺を渡す。

久保屋敷 どうですか？ 奥さんも、紙おむつ。

杏子 いりません！

久保屋敷 え？ あ、いや、すいません。

差し出した名刺を戻し、後ずさる久保屋敷。

久保屋敷 ……んじゃあ、まいどさんでしたー。

久保屋敷去る。

自動ドアの音。

14

診察室の方から、藤堂が「ダダダッ」と駆け足で出てくる。
後ろから峠師長の声。

峠（声） 藤堂さん、藤堂さん！

階段を上がりかけた藤堂立ち止まり、振り返る。

峠師長登場。

峠 藤堂さん。

藤堂 どうもすいませんでした、以後気をつけます。

峠 深呼吸をひとつして。

無言で「スーハー」と深呼吸をひとつする藤堂。

同時に深呼吸をしてしまう杏子としずか。

峠 深呼吸は、吐く方を先にやった方がいいんですよ。

全員「はぁーっ」と息を吐き、深呼吸をする。

峠 冷静になりなさい。

藤堂 はい。

峠 クールアンドファイト、はい。

藤堂 クールアンドファイト。

峠 オー。

きびすを返し、階段を上がる藤堂。

峠 どうもすいません、お騒がせしました。

峠、診察室に戻る。

その3 「休憩部屋」

※ここから先しばらくは、午前中のロビーと、昼時の看護師休憩部屋との描写を同時に行うこととする

かかっていた有線の音楽が消える。

残る杏子としずか。

しずか 面白いですね、師長さんって。

杏子 なんか、この病院、面白い人ばかりですよ。しずか ええ。

しずか、名付け辞典に目を落とす。それを見て、杏子もマガジンラックに行き、雑誌を持って来て読み始める。

ロビーとは違う場所に看護師の休憩部屋が現れる。

鈴木が入ってくる。手には携帯電話を持っている。ボタンをプッシュし耳にあてる。

鈴木 ……もしもし……もしもし？ 飯島さんですか？ あの、病院の鈴木ですけど、寝てました？ すいません。あのですね、飯島さんて、今日の夕方とか、来ないですか？ え？ はい、予定はない。あー、来る。実はですね、あの、下川原って女の子知ってます？ 下川原綾菜。あ、はい。高校生くらいだと思います。あーあーあーで、なんかね、その子がですね、いきなり訪ねてきたんですよ「助産師の飯島さんいませんか」って。多分、できちゃったかなんかだと思んですが…。

伊藤バッグを持って登場。

部屋の隅に座り、お弁当を広げる。が、それはとっても小さなおにぎりが一個と、ウーロン茶だった。

鈴木 詳しいことは飯島さんなら話すと思うんですよ。で、もしかしたらまた夕方に来るかもしれないですね。まあ、私が飯島さん来るかもしれないって言っちゃったから、あれなんですけど…。すいません。えーっそれだけで間に合うの？
(食ってる伊藤に)

伊藤 ダイエット中なんで。
 鈴木 いや、こっちのことなんでですけど、す
 いません。で、もしかして飯島さん来るの
 かなあなんてね。・・・いや、だからほっ
 としてるんですけど。・・・んじゃ、まあ、
 そういうわけで、よろしくお願いします。

と、電話を切る鈴木。

伊藤 飯島さんですか？

鈴木 え？ うん、まあ。

伊藤 今朝方まで、大変だったらしいですよ。

鈴木 なにが？

看護師姿の水谷登場。

伊藤 寝てたでしょ、飯島さん。

鈴木 いや、起きてたって言ってたよ。

水谷 あ、いたいた。

伊藤 お帰り。お昼食べた？

鈴木 (同時に) お帰り。

水谷 あ、はい、寮で。

鈴木 賄い付きだもんねえ。

水谷 伊藤さん、困ってる外人助けちゃいま
 したよ。

伊藤 あら、良かったねえ。

鈴木 どこで？

水谷 あ、ここの、玄関前ですけど。

鈴木 え？ あ、あれ、やっぱり外人だった
 んだ。

伊藤 (同時に) ああ、あの人。

水谷 え？ 違うんですか？

鈴木 いや、違わないと思うよ。

伊藤 外人じゃないとねえ、だめなんだもん
 ねえ。

水谷 はい。

鈴木 なに？

伊藤 占いですよ、占い。

鈴木 ああ。

水谷　なんか幸運が舞い込んで来るんですけど。

鈴木　でも、あれ、朝からずっといたのかなあ。

水谷　え？　朝からずっといたんですか？

鈴木　わかんないけどね。

伊藤　はんだごては？

水谷　いや、それはちよつと……。

鈴木　なによ、はんだごてって？

水谷　ラッキーアイテムですよ。

鈴木　ラッキーアイテムねえ。

藤堂、歯ブラシとタオルを握りしめて登場するなり、ばたりと倒れる。

藤堂　あと五分、横にならせて。

水谷　疲れてますね。

藤堂　力量不足を感じるね。

水谷　そんなこと言ったらあたしなんか。

藤堂　いいのよ、学生のうちは。あたしなんか名ばかりだよ、助産師なんて。そりやそうだよ、出産経験もないさあ、学校出たの助産師じゃ、安心できないよね。

鈴木　そうだね。

藤堂　はつきり言ってくれますね。

鈴木　正直者なの。

藤堂　えーん。貫禄ないんだよねえ。

鈴木　しょうがないよ、若くてちっちゃいんだから。

藤堂　太ろうかしら？（起きあがる）ねえ、やっぱり太ってた方がねえ。

鈴木　それ、言う相手選んだ方がいいよ。

藤堂　あ、すいません。

鈴木　あたしはいいのよ、あたしは！

伊藤　ごちそうさまでした。

鈴木　ほら怒ってる怒ってる。

杏子、思い出したようにトイレに立つ。

伊藤、ウーロン茶をごくごく飲みながら首を振る。

水谷 こないだ、尿検査の紙コップで水飲んでるおばさんいましたよ。

伊藤、吹きそうになる。

伊藤 どこで？

水谷 トイレですけど。

藤堂 まあ、使い捨てだからね。

鈴木 使い捨てじゃなかったら混ぜっちゃうでしょ。

藤堂 いや、当然洗うんですけど。

伊藤 誰が？

藤堂 まあ、一番下っ端かな？

水谷 あたしですか？ でも、この病院では藤堂さんのが後輩ですよ。

藤堂 尿コップでも何でも洗いましょう。

伊藤 じゃあ尿コップ洗い当番は藤堂さんね。

藤堂 やったあ。

鈴木 なんの話してんの？

伊藤 いやあ、誰が尿検査の紙コップ洗うかって話ですけど。

藤堂 毒電波だ！ 毒電波があたしたちになんな話させてるんだ！

鈴木 なによ、毒電波って！

藤堂 あたしには荷が重いですよ。

伊藤 なにが？

藤堂 岩本さん。

伊藤 ああ。

水谷 なんですか？

藤堂 あたしは主任みたく上手に対応できません。

伊藤 岩本さん、8ヶ月だったんだけど、死んじゃったのね、お腹ん中で、赤ちゃん。

水谷 えーっいつですか？

伊藤 まあ、一昨日あたりでしょう。

鈴木 さっきの、飯島さん大変だった話？

伊藤 うん。陣痛促進剤使ったんですけど、今朝方までかかっちゃったみたいですよ。

水谷 生ませるんですか？

しずか、誰もいないのを確認して、ソファの上でストレッチをはじめ。

伊藤 そう。

水谷 うわー。

藤堂 悲しい出産だね。

水谷 メチャクチャかわいそうじゃないですか。

伊藤 悲しかったんだろうね。

藤堂 ちょっとね、おかしくなっちゃってるのよ。

水谷 あー。

藤堂 まあ、そんなに極端じゃないというところで、しばらくここで様子を見ることにしたらしいのですが・・・あたしには荷が勝ちすぎてますよ。あ、もう五分たっちゃったかな？ あーあと三分。

と、横になる藤堂。

杉田が顔を出す。

杉田 まだあ？

藤堂 あと五分です。

鈴木 あれ？ 三分じゃないの？

水谷 あ、あたし行きます。

藤堂 あと五分。

杉田 水谷さん。

水谷 はい。

杉田 一応言っとくけど、岩本さんの動向は注意しておくようにね。まあ、今は旦那さんについててくれるから大丈夫でしょうけど。

伊藤 今ちようどその話してたところですよ。

杉田 岩本さん？

伊藤 うん。

杉田 普通だよ、普通。

水谷 じゃ、行ってきまーす。

四人 行ってらっしゃーい。

杏子、トイレから帰る。

気配を察してス

杉田 で、あたしの友達なんか石割桜にアルミホイール巻こうとして捕まったからね。

鈴木 なんですよ。

トレッチをやめるしずか。

杉田 そりゃ捕まるでしょう、天然記念物なんだから。

鈴木 いや、そうじゃなくて。

杉田 聞こえたらしいよ、指令が。「石割桜を守れ！」ってね。

伊藤 やっぱり指令聞こえるんですね。

杉田 電波だね、やっぱり。

鈴木 玲ちゃんは見えるんでしょ、霊。

伊藤 電波じゃないですけどね。

杉田 怖くない？

伊藤 時もありますけどね。今日もいましたよ。

杉田 やだあ。

伊藤 多分、あの、岩本さんの子供でしょ。

杉田 えーっ。

伊藤 あと・・・。

杉田 あたし、お昼買いに行ってくる。

鈴木 で？

杉田、慌ただしく出て行く。

5

入れ替わりに山本入ってくる。

山本 (杉田に) 買い物行く？

杉田 あ、はい、行きますよ。

山本 頼んでいい？

杉田 いいですよ。

山本 おにぎり二つ、焼きたらことツナマヨ、それからサンドイッチ、これは何でもいい、あと、ミルミルね。あ、それからシュークリームとアロエヨーグルト。

杉田 食べますね。

山本 あらそう？ えっと・・・。

山本、財布からお金を取り出し、杉田に渡す。

山本、千円、お釣り、出るよね。

杉田、お駄賃は・・・。

剛史登場。

杏子 どう？

剛史 まあ、何とか。

杏子 屈辱？

剛史 ・・屈辱だ。

杏子 大したことな

いよ、そんな屈辱

剛史 でもさ。

杏子 女に比べれば

ね。

剛史 まあ、ね。

杏子 痛くもないわ
けだし。

剛史 うん。

杏子 良かった？

ビデオ？

剛史 バカ。

峠 登場。

峠 火野さん、あの、

支払いは、後で、

結果聞きに来た時

でいいですから、

一応診察券だけは

持ってってください

いね。

杏子 あ、はい。

峠、去る。

杏子、剛史、深

々とソファに座

って同時にため

息をつく。

二人 ふあー。

階段より田村下

りてきてそのま

ま診察室へ。

鈴木（声） 火野さ

ーん。火野杏子さ

ん、剛史さん。

二人同時に腰を

浮かす。

二人 気が合うね。

山本 行ってらっしゃい。

杉田、去る。

鈴木 ぞ？

伊藤 ああ、今日のアウスの患者さんね、女
の子と男の子二人連れてましたよ。

山本 え？ 知ってるの？

伊藤 なにがですか？

山本 いや、柳沢さん。

伊藤 いや、知らないですけど。

山本 ふーん。

伊藤 知らないっていつでも、まあ、あれな
んですけど。

山本 なに見たの？

伊藤 診察室に来るとき、一回ソファに尻餅
ついたんですよ、で、それは、その二人の
子供たちが引張ってたんですね。

山本 ……あんまり言っちゃだめなんだけ
ど…あのね、あの人、三回目。

鈴木 えーっ。

伊藤 やっぱり。女の子と男の子でしょ。

山本 いや、それはわかりませんよ。

伊藤 上が女の子、下が男の子。

鈴木 一姫二太郎かあ。

山本 人は見かけによりませんね。

伊藤 よらないですね。

鈴木 もしかして、あの、ぼわんとした人？

山本 そう、なんかケーナみたいな声出して、

伊藤 ケーナって？

山本 一見して全くの清纯派って感じて。

鈴木 えーっ、あの人ですか？

山本 もてそうではあるんだけどね。

鈴木 どんな相手だろ。

山本 さあ、それはねえ。

伊藤 もしかしたら、あの外人。

山本・鈴木 え？

藤堂の寝息が聞こえる。

6

二人、受付に行
き、診察券を受
け取る。

剛史 午前中のうち
だよね。
杏子 まあ、午後で
もいいんでしょ
うけどね。

剛史 早い方がいい
か。

杏子 暇だしね。
剛史 大丈夫だと思
うんだけどなあ。
俺は。
杏子 ひどい。
剛史 あ、いや。
杏子 まあ、濃そう
ではあるけどね。

二人、玄関から
去る。
コンビニの袋が
取り残されてい
る。
二人がいなくな
り、ロビーに一

伊藤 寝てるよ。

山本 寝付きいいわね。

鈴木 疲れてるんですね。

山本 岩本さんの相手してたからね、午前中。

伊藤 寝かしといてあげたいけどね。

鈴木 師長に見つかると面白いですからね。

鈴木、携帯電話を取り出して、呼び出し
音をかける。
すると、手を伸ばして目覚まし時計を探
す藤堂。

伊藤 お、探してる探してる。

峠、登場。

伊藤 あちやー。

峠 なにがあちやーですか？

伊藤 いやあ。

峠 藤堂さん、藤堂さん！

藤堂、むっくりと起きあがる。

峠 藤堂さん、今何してますか？

藤堂 子宮口全開大になってます。

峠 は？

藤堂 まもなく破水すると思います。

峠 藤堂さん。

藤堂 まだいきまないでくださいね。

峠 Wake up! miss 藤堂！

藤堂 あ、はい。

峠 It's time now!

藤堂 あ、はい、すみません。

山本 どうしたの？ 生まれそうだったの？

藤堂 え？ なにがですか？

伊藤 寝ぼけてたのよ。

藤堂 あ、すみません。今行きます。

立ち上がり、出て行くこうとする。

人になると、またストレッチを始めるしずか。

が、すぐに座り込む。

伊藤 どうしたの？

藤堂 立ちくらみ。

鈴木 ありやりや。

峠 (同時に) 大丈夫ですか？

山本 (同時に) ちゃんと寝てる？

藤堂 と思います・・・。

再び立ち上がり、出て行く藤堂。

7

山本 師長、なんか今日英語ですね。

峠 そうですか？

山本 そうですよ。

峠 今日じゃなくても結構英語ですよ。

伊藤 そうですね。

峠 国際化の時代ですからね。

山本 じゃあ、ロビーの外人さんと話しました？

鈴木 え？ ロビーにいるの？

山本 いるよ。

鈴木 それって病院の前うろうろしてた人でしょ。

山本 さあ、それはわかんないけど。

峠 でもあれはイラン人でしょ。

鈴木 イラン人？

峠 いやまあ、イランかどうかはわかんないけど、中近東でしょ？

山本 なるほど、異邦人ですか。

峠 だから、英語はあんまり・・・。

伊藤 でも、オマーンでは 英語通じますよ。オマーンとは限らないじゃないですか。

ってなんでそんなこと知ってるの？

伊藤 首都はマスカットです。

峠 だって、あんまりわかんなかったみたいだから。

山本 なにがですか？

峠 いや、英語が・・・。

杉田、二階から
下りてきて診察
室の方へ去る。

間。

山本・鈴木・伊藤 ははーん。
峠 え？

山本・鈴木・伊藤 いや、別に。

峠 三人とも・・・休憩時間だね。

山本 あ、はい。

峠 それじゃあ、わたしは戻りますから。

峠、去る。

8

山本 ……あれ、絶対話しかけたね。

鈴木 あたしもそう思います。

伊藤 賛成。

山本 師長ってフレンドリーなんだよね、わりと。

伊藤 あのさ、ケーナって・・・。

山本 南米の、ペルーあたりの、笛。

伊藤 ああ。

鈴木 (鼻歌でコンドルは飛んでいく)

徐々に山本も伊藤もコンドルは飛んでいくの世界に入り込んで行く。
水谷 走り込んでくる。

水谷 院長テレビ出てますよ！

三人 え？

水谷 院長テレビ出てますよ。

山本 今やってんの？

水谷 はい。

伊藤 なんで？

鈴木 (同時に) こりゃ大変だ。

とか言いながら腰を浮かす三人。

山本 よっしゃ。

伊藤 あらあらあら。

水谷 早くしないと終わっちゃいますよ。

鈴木　まあまあまあ。

あたふたと全員休憩部屋から去る。

その4 「重大告知」

看護師部屋の明かりが消え、ロビーのみとなる。
同時に、有線の音が滑り込んでくる。
ロビーでは相変わらずしずかだがストレッチをしている。
診察室より田村と杉田が話しながら登場。
声がするとしずかはストレッチをやめる。

杉田（声） だからもう大至急なんて聞くと、つい、おっきい子宮
かしら？ なんて思っちゃうわけよ、笑っちゃうでしょ。

田村（声） うん……。

杉田、田村出てくる。

杉田 うっかり喫茶店で世間話なんかできないでしょ。油断してる
と精子がどーのとか卵子がどーのとか、会陰切開だの、子宮外妊
娠だのインパクト強すぎるでしょ、用語が。でも、あたしたちそ
れが日常だから。ねえ。

田村 うん……。

杉田 うっかり聞かれるとギョッ
とされちゃうんだよねえ。

山本、出てくる。

田村、ソファーに腰を下ろす
と、大きなため息をつく。

山本 竹花さーん、竹花しずか
さーん。

しずか はい。

山本 お小水は、取りましたね。

杉田 あ、そうだ、こないだねえ、
産後の入院してる患者さんがい
たのね。まあ、個室だったんだ
けど、ある時部屋に行ったら、
なんか毛むくじゃらのお尻が見
えてね。

しずか、山本、診察室に去
る。

田村 はあーっ（ため息）。

杉田 まったく産後すぐだよ、我
慢できねえのかよって。

田村 ……。

杉田 振り返って「あ」だって「あ」。「あ」じゃねーよ。確かに
あたしもノックしてすぐ開けちゃったからねって、鍵くらい閉め
ろよなあ。

田村 なんてあたしが・・・。
杉田 ・・・。
田村 なんて？
杉田 ・・・大丈夫だよ、100パーセント治るんだから。
田村 でも、だって。
杉田 大丈夫、じゃなかったらあんなに軽く言わないでしょ。
田村 うん・・・子供生めなくなっちゃうのかな？
杉田 大丈夫！ 大体にしてそんなに子供生みたかったのか？
田村 いや、まあ、うん・・・。そう言われると・・・。

2

杉田 まず、まあ、すぐに落ち着
けっただって無理かも知れないけ
ど。
田村 うん・・・。
杉田 じゃあ、あたし、上に行く
から。
田村 あ、うん。ありがとう。
杉田 ガッツ。
田村 おう！

杉田、二階へ上がりがてら、
藤堂の肩を叩く。

杉田 ご苦労さん！
藤堂 はあ・・・。

二階から、藤堂の手を引き、
アルミホイルを持って環登
場。

環 こっち、やっぱり下の方か
らですよ。来てるのは。
藤堂 あんまり動かない方がい
いですよ。

環 こっち、ああっ、あそこだ！
藤堂 え？

環、注意深く腰をかがめる
と、田村の座っているとこ
ろまで来る。

田村、怪訝そうな顔をしつつも座ったまま。

環 これ、ちょっと、ああ、これを、アルミホイルをその下に・
・・・。

環、アルミホイルを藤堂に渡し、田村の座っている下を指
差す。

環 そこに、アルミホイルを・・・あたしは、もうちょっと近づけ
ないですから。

田村 なんですか？

環 危ないですよ、奥さん。邪悪なパワーが。毒電波が。そのの、

下から。

田村 はあ。

藤堂 すいません、一応、気の済むようにさせてください。

と、言いながら、アルミホイルを田村の下の床に敷く。

田村 なんなんですか？

藤堂 いやあ、なんなんですかって聞かれると答えにくいんですけど……。

環 危ないところでした。奥さん。

田村 え？

環 お腹の赤ちゃんもあともう少しで大変な……。

田村 違うって……。

環 だって5ヶ月なんですよ。

田村 だから違うって言うてるでしょ！

場が凍り付く。

田村 ったく、ふざけんじゃないよ！

藤堂 すいません！ すいません！

環、突然棒立ちになり、表情が消える。そして、なにやらぶつぶつとつぶやき始めるが、なにを言ってるのか聞き取れない。

藤堂、環の肩を抱きかかえ、とりあえずソファに座らせる。

藤堂 すいません、すいません。

3

声を聞きつけた峠師長登場。

田村は息を荒くして立ちつくしている。

峠 どうしました？

藤堂 いや、あの、その、師長。

峠 はい。

藤堂 どうしましょ。

杉田、二階から下りてくる。それを追うように大郷も階段から様子をうかがう。

杉田 どうしたの？ 裕恵ちゃん。

田村 別に……。

藤堂 杉田さん。あの、わたし……。

杉田 うん、わかった。師長、大丈夫です、多分なんでもないです。

峠 そうですか？ 岩本さん、大丈夫ですか？ とりあえず落ち着くまで、ここで、静かに。

藤堂 はい。

鈴木（声） 田村さーん、田村裕恵さーん。

田村、無言で受付へ。

鈴木（声） 520円になりまーす。

財布からお金を取り出し支払いを済ませる田村。
徐々に空気が弛緩してゆき、峠は診察室へ戻る。

杉田 裕恵ちゃん、ちょっと……。

杉田、田村を伴って玄関から外へ行こうとする。
田村、くるりと振り返り、大郷をじっと見て。

田村 たばこ、やめた方がいいよ。

大郷 ……え？ なんて？

田村 ガンになるから。

大郷 ……え？

杉田、大郷に目配せをして田村とともに玄関へ。
自動ドアの音。

4

大郷、しばらく見送ったのち、上がろうとすると、環がしゃべりだす。振り返り、なんとなく聞く大郷。

環 ……わたしが、悪いんですよね。

藤堂 いや、それは……。

環 わたしのせいで赤ちゃん……。

藤堂 いや、絶対そんなことないです。

環 でも……。

藤堂 自分を責めないでください！

環 だって言ってるのよ「お前が殺した、お前が殺した」って。

藤堂 誰がそんなこと言うんですか？
環 そこから、ほら、そこから。

と、さっきまで田村が座っていたところを指差す。

藤堂 今は、アルミホイールが防御してますから。

環、ふっと肩を落とす。

自動ドアの音がして杉田が戻ってくる。

環 あたし、変ですよ。

藤堂 いや……。

環 変でしょ。

藤堂 あの……。

杉田 変なのが普通です。

藤堂 え？

杉田 普通は変です。

環 じゃああたしは？

杉田 変で普通です。

環 どうして？

杉田 ここはそういうところですから。ここでは、普通にいる方がよっぽど変です。ちよっと変くらいがちよっと普通です。だからわたしもちよっと変で普通です。じゃ。

杉田、二階へ向かう。聞いていた大郷は、素早く二階へ。

5

藤堂 ……あの、わたしも変ですよ。ええ、よくかさぶたとして食べてますから、ええ。

環、ようやく頬がゆるみ、笑顔になる。

そこへ、検診を終えたしずかが戻ってくる。

環の姿を認めると、とても嫌な顔をし、離れたソファに座る。

環 あの、すいません。

藤堂 岩本さん。

環 いえ、あの……。

しずかの側へ行こうとする。

藤堂 岩本さん。

環 あの、さっきは変なこと言ってしまつて。

しずか あ、いいえ。

環 あたし、変なんですよ。

しずか あ、いえ……。

藤堂 もう、上に上がりましょう。疲れてるんですから。

環 疲れてませんよ。

藤堂 え？

環 返してもらわなきゃ。

藤堂 さあ、二階へ行きましょう。

藤堂、環の肩を優しく抱えて二階へ行こうとする。

そのまま、二階へ上がろうとするが、振り返り、しずかを見て。

環 赤ちゃん返してください。

藤堂 大丈夫です、大丈夫ですから。

環 その、赤ちゃん。

藤堂なんとか環に階段を上らせる。

環 わたしの赤ちゃん返してください。

二人二階へ上がる。

しずか、ブルルツと一つ震える。

鈴木（声） 竹花さーん、竹花しずかさーん。

しずか はーい。

しずか、受付へ。

鈴木（声） 四千円になります。

しずか あ、はい。

財布を取り出しながら。

しずか あの、さっきの、岩本さんて方ですか？ どうしたんですか？

鈴木（声） うーん（ぼそぼそ）

しずか え？

鈴木（声） （ぼそぼそ）

しずか ああ、そうですか……。

鈴木（声） ちようどですね。お大事に。

しずか どうも。

しずか、診察券をもらい、再びソファに戻る。

しずか ふうーっ。（ため息）

その5 「妊婦退場」

一人ロビーに残ったしずかは、ソファに座り、名付け辞典を読み始める。
するとゆっくりと明かりがしずか一人に絞られてゆき、同時に有線の音楽も遠ざかる。

しずか 助か？ 右衛門、平、吉ってのはどうだ？ まあ、女の子はねえ、子？ え？ よ？ み？ な？ うーん。

明かりと同時に有線が戻ってくる。
診察室の方から伊藤登場。

伊藤 あら？ 会計まだ出てませんか？

しずか いえ、もうとっくに……。

伊藤 ……あ、お迎え。

しずか ええ、まあ。

伊藤 遅いですね。

しずか すぐ終わっちゃいましたからね、健診。

伊藤 院長不在効果ですね。

しずか そうですね。

伊藤 いつもは結構待ち時間長いでしょ。

しずか そのつもりだったんですけど。

伊藤 上手くいかないもんですよねえ。

伊藤、二階へ上がる。

再びゆっくりとしずかを残して明かりが落ちてゆき、有線も遠ざかる。

しずか、大あくびをする。そしてパタンと名付け辞典をとじる。

しずか 顔見てから考えよっと。

明かりと同時に有線が戻ってくる。
診察室の方から伊藤登場。

伊藤 あら遅いですねえ。妊婦を待たせちゃいけませんねえ。

しずか まったくですわね。

伊藤 お腹空いちゃいますわね。

しずか　すでに空いていますよ。

伊藤　どうしちやっただんですかね。

しずか　さあ……。

伊藤、またしても二階に去る。

三たびゆっくりと明かりと音が遠ざかる。

しずか　帰っちゃおっかな？

しずか、明かりから姿を消して、いなくなる。
明かりだけが残る。

その6 「検査結果」

玄関の方から声がするが、明かりはそのまま。

水谷（声） あの、こっちです、カモン。ステイ、ヒア、えーと、
アンド、ウエイト、あ、プリーズ。

明かりの中にマリオの姿が現れる。

マリオは、無言のまま、両手をひざの上に握りしめて、背筋を伸ばしてきちんと座る。顔は正面を向いて、睨みつけているようである。

間。

突如、昼を告げる市役所の音楽が鳴り響く。すると、明かりも一気に昼になり、有線も復活する。

自動ドアの音。

火野夫妻登場。相変わらず剛史はおどおどしている。診察券を受付に出す。

鈴木（声） すべり込みセーフですね。

剛史 （ビクッ）

杏子 すいません。

シャーツとカーテンの閉まる音がする。

杏子、剛史、ソファに座る。

剛史 ちょっと・・・心配だな。

杏子 あたしはもう心配することなんてないから。

剛史 あ、そう。

杏子 トイレ、二階だって。

剛史 え？

杏子 男子トイレ。

剛史 ああ。

杏子 まあ、診察より付き添いかお見舞いだもんねえ。

剛史 そうだね。

杏子 したくなったら、どうぞ。

剛史 したくないよ。

杏子 だから、したくなったら。

剛史 えっち。

杏子 バカ。
剛史 へっへっへ。

2

自動ドアの音。

診察室から峠登場。

ほぼ同時に、玄関の方から、道高が登場する。
そして、キョロキョロとしずかを捜す。

峠 火野さん。

杏子 はい。

剛史 はいはい。

峠 どうぞ。

杏子 あ、はい。

道高 あれー？

杏子、診察室へ、こそこそついていく剛史。

相変わらずキョロキョロしながらも、ソファに座る道高。

道高 あれーっ？ っかしいなあ。トイレかなあ。長引いたからなあ。

落ち着かない道高だったが、マリオを見つけてなんとなく安心する。

道高 あの一。

マリオは聞こえないかのようにまっすぐ前を向いている。
道高は、マリオの顔を覗き込み、合点したように。

道高 あの一、ハロー？

すると、マリオはちらりと道高を向く。

道高 あの、マイウィフ知りませんか？

マリオ ……。

道高 どこ行っちゃったかな。お腹、おっきい、ヤングガール。ド
ウーユーノウウ？

マリオ、無言で首を振る。

道高、受付に行く。

道高 あのー、すいませーん。

シャツとカーテンの音がする。

道高 あの、すいません、竹花しずかはもう帰りましたでしょうか？

鈴木（声） えーと、帰ったかどうかはわかんないですけど、会計は済ましてますね。

道高 あー、そうですか。

道高、振り返ってぐるっとロビーを見回す。

道高 うーん。

3

ふと、診察室の方から出てくる座敷わらしを見つける道高。それを目で追うと、マリオのすぐ側に行ったようである。

診察室の方から伊藤登場。

伊藤も座敷わらしの動向を見ている。

なんとなく伊藤と道高の目が合う。

道高 あのー、つかぬ事をお聞きしますが……。

伊藤 はいなんでしよう？

と言いかけたところで、道高はマリオのまわりの座敷わらしが、階段を上がって行くところを目で追う。

伊藤は、その視線の先と、道高の顔を見比べる。

伊藤 竹花さん、ですね。

道高 あ、はい、そうですけど。

伊藤 二階に、上がっていききましたね。

道高 え？

伊藤 女の子と、男の子でした。

道高 あの、見えるんですか？

伊藤 奥さんから聞きました。あんまりありがたくないですよ、見えても。あ、でも仕事柄……。

道高 あ、いや、これはまあ、仮装みたいなもんで……。

伊藤 コスプレですか？

道高 まあ、そんなようなもんです。あ、いや、今ちゃんと法事に

行って来たんですけど、あの、本職じゃないって意味で……。
伊藤 は？
道高 いや、なんか、場にそぐわな過ぎるといふかなんというか。
話すと長くもないような気はするんですけどまあ……。

4

自動ドアの音がする。

伊藤 奥さん、しばらく待ってらっしゃいましたけどね。
道高 ああ、そうですか。
伊藤 診察早かったですよ。
道高 あちゃー、こういう時に限って……。
伊藤 なにしる院長いいいですから。

玄関から、小さな棺桶を抱いた重盛が登場する。
そして、道高を見た途端、小さく震え始める。
それを見た道高は軽く会釈をする。

道高 あ、ども。
重盛 ……なんて坊主がいるんだよ……。
伊藤 あ、いや、あの……。
道高 わたしは、その……。
重盛 誰が坊主呼んだんだよ……。
伊藤 あの、岩本さん……。
重盛 誰が坊主呼べって言ったんだよ！
道高 あの、わたしは、その、身重の妻を迎えに来ただけでして、
その。
重盛 どこにいるんだよ、その身重の妻は……。
道高 いや、いなくなっちゃって……。
重盛 そんなふざけた坊主がいるか！
道高 いや、そう言われても……。
重盛 なんて、なんで坊主がそんな髪型してんだよー。

泣き崩れる重盛。

5

自動ドアの音がする。
道高、伊藤、注目する。
花屋の森下多美代が大きな花束を抱えて登場する。

森下 愛宕山ガーデンです。花束お届けにあがりましたー。

緊迫した空気の中を何も気にせず通り過ぎる森下。

森下 まいどどうもー。あら？
マスター？

道高 え？ あれ？ 多美代ちゃん。

森下 どうしたの？ お坊さん
みたいなカツコしてー。

道高 いや、だから、これは。

森下 そっか、定休日か。でも、
なんでー？

道高 いや、だから、付き添い
なんですよ。

森下 付き添いでなんでお坊さ
んなのー？

伊藤 花束、誰宛ですか？

森下 ああ、大郷さんです。

伊藤 お部屋は二階の樺の間に
なってます。

森下 あ、はい。でもマスタ
ー。

伊藤 さあさあどうぞ。

森下 いや、ちょっと、マスター！

伊藤 さあさあ急いで・・・。

伊藤、森下を素早く二階へ追いやる。

伊藤 あの、岩本さん、あの、さっきの人、ほんとに奥さん迎えに
来たんですよ。で、あの格好は、法事に行つて来て、どうしても
時間がなくて、それで、コスプレとか、仮装とか、そういったふ
ざけたものじゃないですから・・・。

岩本・・・すいません・・・。

伊藤 奥さん、待ってますよ。

岩本 すいません、ついカツとなって・・・。

伊藤 大丈夫ですよ。

岩本・・・そうですよね、・・・俺なんかよりね・・・。

伊藤 さあ、二階行きましょう。

岩本 はい・・・。

重盛 (つぶやき) 今度は花屋か

・・・どいつもこいつも。

伊藤 あの、落ち着いて・・・。

峠登場。

峠 どうしました？

伊藤 いや、あの、師長。

伊藤、道高を見る。

峠はそれにつられて道高を見
て、少しあわてる。

峠 あら、まあ、その格好は。

道高 いや、あの。

峠 Sorry。(マリオに)

峠、道高を連れて診察室の方
へ去る。

伊藤、岩本、ゆっくりと階段を上ってゆく。

6

一人マリオが残る。
マリオは首を一回しすると、立ち上がり、階段を上がる。
誰もいない空間。
診察室の方から杏子と剛史が現れる。

杏子 ……。
剛史 安くなったな。
杏子 え？
剛史 安くなった。
杏子 何が？
剛史 俺。
杏子 え？
剛史 俺の値段よ。
杏子 何言ってんのよ！
剛史 ははは。
杏子 ほら、もう一回やってみないとはっきりしないって……。
剛史 気休めだよ。そんなの。
杏子 でも、それだけじゃないと思うよ。
剛史 そんな……。
杏子 ね、座ろう。
剛史 はいはい。ふうーっ。(ため息)
杏子 ため息なんかついてないで。
剛史 A I Dか……。
杏子 な、何言ってんのよ！
剛史 ははは。
杏子 結果なんだから、子供なんて。
剛史 じゃあお前は子供欲しくないのかよ。
杏子 そんなことないけど……今だよ、検査結果出たの！
剛史 それが？
杏子 だって……。
剛史 今日でも昨日でも一年前でも一緒だよ。
杏子 ひどい……。
剛史 そうか？
杏子 ひどいよ。
剛史 ははは。

杏子、立ち上がり、出て行こうとする。

剛史 どこ行くんだよ！

杏子 お財布、取ってくる。

剛史 ふーん。

自動ドアの音。

7

一人残った剛史は、ソファにそっくり返って、股間を指ではじく。

剛史 いて。

足早に通り過ぎて玄関から去る道高。

それを目で追い、股間に向かって合掌する剛史。

大先生登場。

自動ドアの音。

大先生 おおっ、いたいた、黄昏てら。

剛史 あ、どうも……。

大先生 気にするんじゃないよ、もう一回見てみないと。食生活とか関係してくるからね。

剛史 でも……。

大先生 大丈夫大丈夫、気休めじゃないから。

剛史 そうですか？

大先生 今すごい進歩だから、顕微受精とか色々あるし。まあ、金かかるけどね。

剛史 まあ、お金は、なんとか……。

大先生 あんまりお金かけないんだったら、奥さん湯治に行かせるのよ。子宝の湯に、一人で。

剛史 え？

大先生 夜這いに来るから、でも今はなくなったのかなあ。

剛史 それって違う男の子供じゃないですか、しかも夜這い。

大先生 昔の人は大人だったのよ。

剛史 いやあ……。

大先生 まず今のは冗談としてもだ、いざとなったらクローンあるからクローン。

剛史 え？ そっちの方が冗談でしょ。

大先生 これ、内緒ね、トップシークレット、うちの息子、今の院

長な、あれ、俺のクローンだもん。

剛史 え？ そんな、何年前の話ですか。

大先生 大体信じないよな、普通。でもそれでいいんだ、ばれないから、DNA鑑定でもしない限りな。

剛史 だって、猿だってこないだ……。

大先生 天才ってのは、いつだって田舎にいるんだよ。

剛史 えーっ。

大先生 な？ 希望出たでしょ。

剛史 いやー、なんて言っただいのか……。

大先生 だからまあ、そんなに黄昏ないでな。

剛史 あ、はい。

大先生 はっはっは。

剛史 ……でも、院長先生でつかいじゃないですか！

大先生 栄養状態よ、栄養状態。

剛史 ふーん……。

大先生 はっはっは。

8

いつのまにか峠師長が立っている。

峠 大先生！

大先生 なあに？

峠 冗談もほどほどに。

大先生 いいんだいいんだ。あ、そうだ、うぐいすさん、一緒にどう、お昼。

峠 遠慮しときます。

剛史 (同時に) 冗談で……。

大先生 あらー、残念。

自動ドアの音がして戻ってくる杏子。

杏子 あ、どうも。

大先生・峠 どうも。

杏子 あの、お財布持ってない？

剛史 え？ あ、ないよ。

杏子 あ、そう。ないのよ。

剛史 あれ？ 入れたでしょ？

杏子 そのつもりだったけど……。

峠 会計、この次でもいいですよ。

剛史 いや、でも、次いつ来られるかわからないし……。

大先生 いいんだ、いいんだ、なんかついでの時でも。
杏子 そうですか？ すいません。

剛史 おいおい。

大先生 いいって。

峠 利子はつけませんし。

大先生 トイチくらいいいとく？

剛史 大先生、それ悪徳ですよ。

大先生 まあ、医者はなあ。

杏子 ほんとにどうもすいません。二、三日中に必ずお支払いに来ますから。

峠 いつでもいいですよ。

剛史 すいません。

剛史・杏子立ち上がり。丁重に礼をして玄関へ。

峠 あ、診察券。

峠、受付まで行き、診察券を探して杏子に渡す。

峠 それじゃ、お大事に。

杏子・剛史 お世話様でした。

自動ドアの音。

立ち上がり、去りかける大先生。

大先生 鳴かぬなら、鳴かせてみたいうぐいすちゃん。

峠 何言ってるんですか！

大先生 俺もさあ、男やもめ長いしさあ。

峠 やもめじゃないでしょ。

大先生 あれえ？

大先生去る。

自動ドアの音がする。

「ふっ」と鼻で笑う峠師長。

9

登場する道高、そのまま二階へ上がって行こうとする。
それを見とがめた峠師長が声をかける。

峠 あの！

道高 はいなんでしよう。(すでに階段にいる)

峠 やっぱり、そのかっこ……。

道高 あああ……。

峠 ねえ。

道高 はい。

階段から下りてくる伊藤。

伊藤 奥さんなら上にはいませんよ。

道高 あ、そうですか……。

峠 (同時に) どうですか？ 岩本さんは……。

伊藤 どっちでしょう？

峠 まあ、どっちも。

伊藤 まあまあですね。

峠 藤堂さんは……。

伊藤 疲れてますね、あれは。

峠 そうですか。

道高 わたし、んじゃ、これで。

峠 お大事に。

道高、階段を下りて、玄関へ。

伊藤はすでに階段を下りていて、診察室へ向かう峠の後を追おうとしている。

マリオが階段から登場。

道高と伊藤の視線がマリオをとらえる、一瞬の後、道高と伊藤の視線が合う。そして、二人とも軽く会釈をし、道高は玄関へ、伊藤は診察室の方へと去る。

自動ドアの音。

マリオ戻ってソファに腰掛ける。

二階から花屋の森下が下りてくると、テーブルの花を見て首を傾げる。

森下 うーん。

ちよこちよこつと花をいじって、一本花を抜き取る。

森下 うん、これでよしと。

一瞬考えた後、抜き取った花をマリオにあげる。

森下 はい、これ、あげます。
マリオ え？ あ、うー。
森下 オーケーオーケー、大丈夫大丈夫。それじゃ、毎度ありがとうございましたー。

森下 去る。

自動ドアの音。

見送ったマリオは立ち上がり、花を捧げて一回転する。
登場する峠師長。

峠 あら。

マリオ、あわてて花を隠す。

峠 A flower thief is innocent,
isn't it?

マリオ は？

峠 (ゆっくりとfとthに気をつけながらくり返す)

マリオ いやあ・・・。

峠 ノープロブレムノープロブレム。

といいながら、首を傾げつつ去る峠師長。

10

もらった花をじっと見つめて、またソファに座るマリオ。
有線の音楽が変わる。

診察室の方から柳沢登場。

なんとなく目がぼーっとしている。

マリオ 大丈夫？

柳沢 マリオ・・・。

柳沢、マリオの胸に崩れていきそうになるが、すんでの所で立ち止まる。

マリオ どうしたの？ 大丈夫？

柳沢 うん・・・なんでもない。

マリオ・・・手術代、俺、払うよ。

柳沢 バカ。

マリオ いや、バカって言われても・・・。

柳沢 あたし、．．．もうセックスしない。
マリオ え？

柳沢 ．．．もう、しない．．．。

マリオ ．．．そうか．．．。

柳沢 別に、あなたのせいじゃないから．．．。

マリオ うん．．．。

柳沢 誰のせいでもないから．．．。

マリオ うん．．．。

マリオ、花屋からもらった一輪の花をあげようとする。

柳沢 バカ．．．。

マリオ うん．．．。

ゆっくりと明かりが落ち、暗転。

その7「緊急事態」

暗転と同時に市役所の五時を告げる音楽が鳴り響く。
ゆっくりと明るくなると、夕暮れ時。

一人ロビーで新聞を読んでいる大先生。

自動ドアの音。

スーツに野球帽をかぶった怪しい男が玄関から現れ、一直線に階段に向かい、階段を上がって行く。

大先生、ちらりと見るが、気にしないで再び新聞に目を落とす。

大先生 ……暇だな……よしっ。

大先生、立ち上がり、新聞をマガジンラックに戻すと、一つ伸びをして去る。

すれ違いに二階から鈴木が下りてくる。診察室の方からは
峠登場。

鈴木 書類、オツケーです。

峠 あ、そうですか。落ち着いてますか？ 二階は？

鈴木 ええ、まあ、大騒ぎにはなってないみたいですよ。

峠 平和ですねえ。

鈴木 あ、大郷さんの子が、イヤそうな顔しておっぱい飲んでました。

峠 平和ですねえ。

鈴木 はい。

鈴木、去る。

峠、二階へ上がる。

その後ろ姿を確かめるようにして大先生出てくる。

そして、去ろうとするが、藤堂と会い、後ずさりして出てくる。

大先生 ほら、もういないな、患者さん。

藤堂 ええ、まあ。

大先生 出産予定もないし、いいよね。

藤堂 え？ 帰っちゃうんですか？

大先生 んじゃ、あと、よろしく頼むな。うぐいすさんには忍ぢゃ

んからしゃべっというよ。

藤堂 大先生！

大先生 だつてうぐいすさんおっかないしさあ。

藤堂 あとちょっとなんですよ。

大先生 んじゃ、そういうことで、ぼくちゃん愛人のところ行ってくるから、何かあったらポケベルでも呼んで、持っていないけど。

藤堂 だめです！ 大先生！

藤堂、両手を大きく広げて、通せんぼする。

大先生、フェイントをかけて、玄関の方に去る。

藤堂 あ。

大先生 んでまず！

自動ドアの音。

2

藤堂 ちっ、フェイントかあ。

怪しい男、二階から下りてくる。そして、何事もなかったかのように、玄関へ。

藤堂もなんとなくそれを見送る

様子をうかがうようにして、峠師長が階段から下りてくる。

自動ドアの音。

藤堂 師長、大先生がですね。

峠 泥棒です。

藤堂 え？

峠 泥棒です、警察に電話してください。

藤堂 ええ？

峠 あたしは、ちよつと尾行してきます。

藤堂 え？ ちよつと師長！

峠 先を急ぎますので！

藤堂 師長！

峠、素早く玄関から出て行く。

自動ドアの音。

峠（声） あ、こんにちは。

福子（声） あ、こんにちは。はあっ、はあっ。

輝彦(声) どうも。
藤堂 ええー、ちよっとおー。

藤堂、去ろうとする。
福子、輝彦登場。福子はもうはち切れんばかりのお腹をしていて、輝彦は、手にビデオを持って撮影している。

輝彦 まだ、大丈夫ですよね！
藤堂 え、まあ、大丈夫ですけど、ちよっと待ってください。あ、ビデオだ。

藤堂、受付から顔をつっこんで。

藤堂 ちよっと、誰か、警察、警察に電話して！

輝彦 なんかまずいですか！

藤堂 いやそうじゃなくて。

輝彦 (ナレーション) 何か重大な事件が起こってる模様です。

藤堂 泥棒だって！ 今師長が尾行してます。早く電話、警察。

輝彦 (ナレーション) どうやら泥棒が入ってしまったようです。
大変な時に来てしまいましたね、奥さん！

藤堂 大丈夫ですか？

福子 出産は常に大変です。

はあっ、でも、四度目ですから

・・・はあっ。お恥ずかしい

はあっ。

輝彦 (ナレーション) 恥ずかしがっています。

藤堂 あの、とりあえず診察券出してください。

福子 あの、はあっ、初めてなんですけど・・・。

藤堂 え？

福子 もう四度目なんで、大丈夫かなあなんて、思ってたら、こん

なになっちやって・・・。(かなり息が荒い)

伊藤(声) ほんとに警察呼ぶの？

藤堂 え？ とりあえず、警察は呼んでください。だって師長が・

・・・あ、こっちはまず、保険証を。

輝彦 あ、これです。

藤堂 はい、保険証です、カルテと診察券作ってください。

伊藤 警察って何番だっけ？

藤堂 110番でいいでしょ

福子 今時、四人目なんて、いないですよ・・・。

藤堂 そんなことないですよ。

福子 はあっ、はあっ。
藤堂 ちよっと、大丈夫ですか？
福子 だと思っただけです……。
輝彦 (ナレーション) いいながらも、息はとても荒いです。
福子 横になってもいいですか？
藤堂 いや、もちろん。ちよっと、誰か来て！ もしかして、おし
るしとありましたか？
福子 ええ、まあ、あったかな、なんて。
藤堂 ええっ？ じゃあ、ちよっと……。ストレッチャー！ 頼
むから誰か来てー！ 四人目って言いましたよね。
福子 はい。
藤堂 帝王切開したことがあります？

首を振る福子。

藤堂 ないんですね！
福子 はい……。

3

二階からシートを持って杉田が下りてくる。

杉田 ほういほういどうした？

藤堂 助けてください。

杉田 さあ何しましよ。

藤堂 あの、ストレッチャー！

杉田 ほういほうい。

藤堂 あ、ちよっとその前に、そのシート、広げてください！

杉田 ほういほうい。

藤堂 あの、ここ、ここです。持ってきてください。

杉田 何すんの？

藤堂 内診します。

杉田 おおっ！ ここですか！ チャレンジャー！

山本、水谷登場。

輝彦 大丈夫？

山本 泥棒だつて？ 何やってんのー！！

福子 はあっ、はあっ。うん。

藤堂 全開大だ！

山本・杉田・水谷 え？

藤堂 生まれます！ どうしましよー！

山本 大先生は？
輝彦 生まれるって！

藤堂 愛人のとこ行きました！
山本・杉田 ええっ！ いつ？
藤堂 ほんとにさっきです。
杉田 まだいるんじゃない？ 早苗ちゃん、探してきて。

福子 嬉しい！ あなたの子！
輝彦 がんばれ、ヒッヒッフー。
福子 ヒッヒッフー。

水谷 あ、はい。

藤堂 玄関から出てった。

山本 師長は？

水谷 玄関へ。
自動ドアの音。

藤堂 泥棒追っかけてっちやいました！

福子 ううっ！

藤堂 まだ、まだいきんじやだめですよ！ どうしましょ！

山本 だって助産師あんた一人しかいないんだから……。

藤堂 えーっ！ だってあたしま

だ一人で取り上げたことないん

ですよ！

山本 やるしかないでしょ！

藤堂 ふあい（泣きそう）。

杉田 ヒッヒッフーはいいんだ

っけ？

伊藤登場。

伊藤 警察には電話しましたけど。

藤堂 警察！ ああ。オツケーです。

輝彦 いたい？

福子 大丈夫、痛くはないんだ

けど、はあっ、はあっ。いき

みたい。

山本 まだです！

鈴木登場。

鈴木 来ましたよ、応援。

藤堂 ストレッチャー。

杉田 いいや、このままソファ押してっちやおう！ さあ、行くよ！

山本 水谷さんはー？ 大先生いたー？

勢いに押され、ソファを押ししていくみんな。ただ一人ビデ

才を回す輝彦。

山本 あんた何してんの！

輝彦 いや、記念に……。

と言ってる間にソファは押されて引っ込む。

山本 あんた誰？

輝彦 誰って言われても……。

山本 息子さん？
輝彦 いえ、夫です！
山本 え？
輝彦 夫です！
山本 ……立ち会うの？
輝彦 はい！
山本 ……いらっしやい！

山本、輝彦、去る。

4

誰もいないロビー。
有線の音楽だけが響く。
夕暮れの色が鮮やかにロビーを彩る。
自動ドアの音。
飯島が、下川原の体を抱きかかえるようにして登場する。

飯島 ほら、しっかりして。歩いて……こっち……とにかく座
って……。

下川原 だって、だって……。

下川原はどうやらぐずぐずと泣いているようである。
二人は並んでソファに座る。

飯島 いい？ 順を追って話さなくていいから、どうしたいの？
下川原 ぐすつ、ぐすつ、わかんない、です。
飯島 わかんないじゃなくて。
下川原 だって、智樹君が、智樹君が……。
飯島 この際智樹君関係ないの！
下川原 でも、智樹君が……。
飯島 そうかも知れないけど、智樹君は助けてくれないんだから。
下川原 そんなことないもん。智樹君が生めって言ったら……。
飯島 じゃあ堕ろせって言ったら？
下川原 わかんない。
飯島 もし生んだらどうやって育てるの？
下川原 ……。
飯島 学校は？
下川原 ……。
飯島 誰が働くの？ 智樹君？ 智樹君は学校は？
下川原 もう、わかんないですよ！

飯島 そうやって人のせいにするの？！

飯島、抱きかかえていた下川原を離し、向かい側に座る。
飯島をゆっくりと目で追って、顔を上げる下川原。

飯島・・・あなたのお母さんもね、若かったけど、あなたよりずっとしっかりしてたよ。だってあたし教えられたもん、母親ってのは年じゃないんだって。

下川原 でも、だって、あたし・・・

飯島 決めるのは自分。間違っても人のせいにしちゃダメ。誰の子でもない、あなたの子なんだから。両親が決めるんでも、智樹君が決めるんでもないんだから。

下川原・・・はい・・・

飯島 いい？ 想像力を働かせて、自分で判断して、それで決定しなさい。どっちに転んでも、ものすごく重いものを背負っちゃうことだけは間違いないんだからね。それが決まったらね、いくらでも手伝ってあげるから。ただし、期限は一週間。出来れば3日以内、よく考えて。

下川原 え？

飯島 当然でしょう。危険があるんだから。

下川原・・・はい・・・

飯島 よし、顔洗ってらっしゃい。トイレあっち！

飯島、下川原の顔を両手で挟んで、軽く叩く。

下川原トイレに去る。

5

大きくため息をつく飯島。そして、忍び足で二階に向かう。
自動ドアの音。

顔を赤く腫らした杏子登場。どうやら殴られたらしい。
そして、一番目立たないソファのところで小さくなる。
診察室の方から靴を持った水谷登場。

水谷 あれーっ？

玄関へ通り過ぎる。

自動ドアの音。

走り出てくる鈴木。

鈴木 あれーっ？

鈴木、戻ろうとすると、水谷戻ってくる。

鈴木 ああ、いたいた、大先生いた？

水谷 ダメです。いません。

鈴木 素早いなあ、いなくなるときは。

水谷 自宅の方も見てきたんですけど。

鈴木 どこ行ったんだろ。

水谷 愛人のところらしいですよ。

鈴木 ……釣り、かあ。

水谷 愛人で……。

鈴木 川よ、沼よ、湖よ。

水谷 どうですか？ あっちは？

鈴木 まあ、なんとか、忍ちゃん頑張ってるみたい。

水谷、杏子に気付く。

水谷 ……あの……。

杏子は俯いたまま顔を上げない。

水谷 あの、今、先生いなくなっちゃったんで……。

鈴木 あれ？ あのー、会計ですか？

杏子 (俯いたまま) ええ、まあ……。

鈴木 ちょっと待ってくださいね、呼びますから。

鈴木、去る。

6

水谷も鈴木を追って去ろうとすると、二階から、飯島が下りてくる。

飯島 二階誰もいなくなってるよ。

水谷 え？ あ、飯島さん！ あの、分娩室！

飯島 なに？

水谷 なんか、急に産気づいちゃった人が来て……。

飯島 あたしは今日オフだから……。

水谷 大先生いないんですよ！

飯島 大きな問題ある？

水谷 いや、わかんないですけど。

飯島 問題なければ大丈夫！ 彼女も一人前なんだから！

水谷 でもー。

飯島 それより二階！

水谷 はいー、でもー。

飯島 うるさいわねえ、二階で何かあっても知らないよ！

水谷 すいません！

水谷、二階へ上がる。

飯島 まったく……。

飯島、杏子に気付く。そして、よくよくのぞき込んで、顔が腫れているのに気付く。

飯島 ……どうしたの！ 誰に殴られたの！

杏子 ……うちの、人……。

飯島 ……どうして？

杏子 子供、いらないうって言ったら……。

飯島 なんて？

杏子 精子ないんです、あの人。

飯島 え？

杏子 今日の検査で……。

飯島 だって一回じゃ……。

杏子 そうも言ったんですけど……。

7

下川原、トイレから出てくる。

飯島 顔、洗った？

下川原 はい、でも……。

また、ぐすぐすと泣き出す下川原。

飯島 ……しようがないわねえ。

突然目覚まし時計の音が鳴る。

それは、剛史が忘れていったコンビニの袋から鳴っていた。

三人の注目が集まる。

杏子 あ、それ。

飯島 なに？
杏子 うちの人、忘れていったやつ。
飯島 目覚まし？
杏子 なんか、売ってたんですって。
飯島 ふーん。

杏子、コンビニの袋を取りに行き、袋の中をのぞき込んで目覚ましを止める。
すると、袋をのぞき込んだ杏子が、力なく笑い始める。

飯島 どうしたの？
杏子 これ・・・。

杏子を取り出したのは、ドリンク剤の小さな瓶だった。

飯島 ユンケル？

杏子、次第に泣き笑いになっていく。

杏子 バカだねえ。
飯島 ユンケルねえ。
杏子 ほんとに、バカなんだから・・・。

杏子の泣き笑いにつられて、下川原も泣いている。
二人の泣き姿を見比べる飯島。

飯島 あーもう、泣くな！

ぐずぐずと泣きやまない二人。

飯島 泣くな！

さらに激しく泣く二人。

飯島 泣くな！

今度は、息を止め、ぐっところえる二人。
すると突然、分娩室の方から、生まれたばかりの赤ちゃんの泣き声がする。
三人、顔を上げ。

三人 あ、生まれた。

赤ちゃんの泣き声は力強く響き、そして遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。

ゆっくりと暗くなり、音だけが残る。

そしてその音も一瞬にして消える。

暗闇と静寂が残って。

—
了
—